

YOKOHAMA

横 浜 市

子どもの居場所づくり

課題解決ケースブック

Problem Solving Casebook

2020



目次

p1 事例集の発行にあたって

p2 横浜市「子どもの居場所づくり課題解決事例集」をご覧になる皆さまへ

p4 用語解説

p5

Case 1

おなかも心も満たす居場所

金沢子ども食堂/ホッとサロン すくすく

金沢区

広報周知

支援者の関わり

協力ネットワーク

p11

Case 2

外国につながる子どもたちへの学習支援

ゆう
友ゆうスペース

神奈川区

支援者の関わり

役割の設定と運営

資金と場の確保

利用者・担い手の確保と対応

協力ネットワーク

p17

Case 3

横浜・東戸塚を拠点とするフリースクール

おっちー塾

戸塚区

利用者の確保と対応

担い手の確保と対応

資金と場の確保

p23

Case 4

都筑冒険あそび場

まんまるプレイパーク

都筑区

担い手の確保と対応

広報周知

ニーズ把握

人材養成

役割の設定と運営

p29

Case 5

学習支援・ごはん亭

山芋の会

南区

活動内容・活動方法

支援者の関わり

協力ネットワーク

資金と場の確保

p35

Case 6

子どもへの学習支援と一緒に作って食べる子ども食堂

アソシエーション てらこや／こどもごはん

緑区

活動目標の決定・役割の設定と運営

活動内容・活動方法

場の確保・資金の確保・広報周知

子どもとの関わり

p41

Case 7

空き家を利用したコミュニティ

街の家族

青葉区

活動目標の決定・役割の設定と運営

運営方針・資金の確保（立ち上げ期）

利用者・担い手の確保と対応

スキル（人材養成）

資金と場の確保（現在・今後）

p49 編集後記

事例集の発行にあたって

現在、全国的に、地域における「子どもの居場所」の活動が盛んになっています。

「子どもが生き生きと遊べる場所をつくりたい」

「楽しく学習して成長の喜びを感じて欲しい」

「不登校の子どもたちのチカラになりたい」

「食を通してお腹も心も満たしてもらいたい」

「子ども同士、子どもと大人、もっとたくさんつながりをつくりたい」

居場所づくりをはじめめるきっかけは様々ですが、「子どもたちのために」という願いや想いは、同じです。

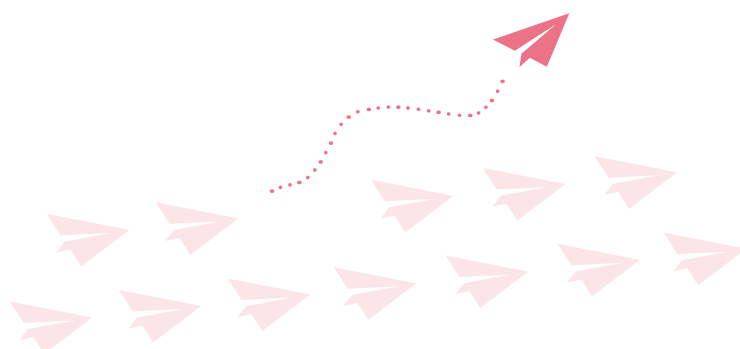
このような地域の活動が広がる一方で、財源、担い手、活動場所の確保、活動の周知など、活動上の課題も顕在化しています。

本事例集は、課題を抱える団体が解決手段を得るためのヒントをつかんでいただくことを目的として、課題を乗り越えるために意欲的に活動を行っている団体の取組事例を掲載しております。

ご多忙の中、取材にご協力いただきました各団体の皆様に感謝申し上げますとともに、この事例集を参考に、地域における子どもの居場所の活動がより一層活発になることを期待しています。

令和2年2月

横浜市こども青少年局



横浜市「子どもの居場所づくり課題解決事例集」 をご覧になる皆さまへ

本紙に紹介する「子どもの居場所」7事例について

本紙に紹介する7事例は、すべて、横浜市民が運営する「子どもの居場所」です。

令和元年10月～12月、市内の「子どもの居場所」45か所に「子どもの居場所の運営状況について」調査を行いました。その結果、「子どもの居場所」を運営されている団体が、どのような目的を持って運営をされているのか、また、どのような課題を抱え、どのように解決にむけて取り組まれているのかが見えてきました。

本紙では、学習支援・子ども食堂・プレイパークなど、活動種別が異なる活動の選択について考慮しつつ、課題や解決法を詳細に回答してくださった7団体を選定し、更に、ヒアリング調査を行い、事例にまとめています。

「子どもの居場所づくり課題解決事例集」制作の目的

①「子どもの居場所づくり」の推進

次世代を担う子どもたちを、家庭や地域で支え、自らが持つ創造性やエネルギーを発揮しながら、たくましく生きる力と思いやりの心を持つ人間へと育てていくことが必要です。

しかし、近年、人と人との関係が希薄になり、孤立感を抱え、自己肯定感が低下する中、人との出会いや多様な経験することに不安を感じる子どもが増えています。

同時に、子どもの育つ家庭も様々な課題に直面しており、両親の共働きや長時間労働など、子どもが家庭においても、孤独で十分家族との時間に恵まれない等の課題も見えています。そのような状況下、地域において子どもたちが、

- 1) 安心して安全に過ごすことができる居場所
 - 2) 人との交流や多様な体験を通じて社会に参加し自立・共生していく土台を育むことができる居場所
- が求められています。

本紙で、市内、様々な地域、場所で、これらの目的を実現しようとしているキーパーソンや団体を紹介することで、「子

どもの居場所づくり」が推進されることを目指しています。

②「子どもの居場所」の多様性を理解する

「子どもの居場所」は、多様性があります。子どもといっても年齢は、乳幼児から10代後半の青年期の子どもまで。また、生活のしづらさや育ちが阻まれている状況としては、外国籍の子ども、不登校など家庭に閉じこもった子ども、経済的貧困など家庭の課題がある子ども、障害がある、または障害の疑いがある子ども等、様々な子どもがいます。

また、それらの子どもに対する居場所や具体的な支援についても、近年、学習支援や子ども食堂が増えています。学習支援と言っても、教科学習支援だけではなく、多様なイベントや野外プログラムなど体験的学習の機会を作っている団体も増えています。子ども食堂でも、子どもたちに食の提供をするだけでなく、食事の作り方などを定期的に教えたりするなど、生きる力を育むプログラムをいれている活動が多くなっています。

更に居場所では、子どもに対してだけでなく、家庭についても手を差し伸べ、子育ての不安に寄り添い、経済的な課題がある家庭には、地域や様々な支援機関とネットワークを構築し、ニーズに応える支援を行っている活動もあります。

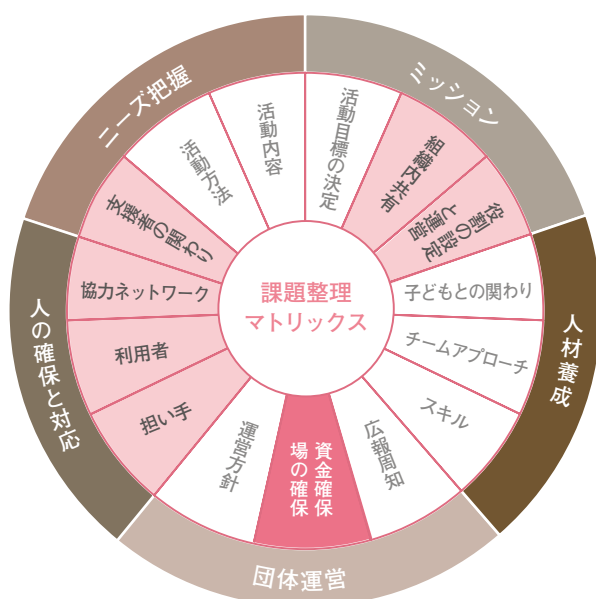
本紙では、できるだけ詳細に活動を紹介することで、「子どもの居場所」の多様性についての理解を深めることも目指しています。

③「子どもの居場所」運営における課題の整理と解決法を拓く

令和元年の秋に行った調査によって、「子どもの居場所」を運営する団体は、大きく5つ、更に15の課題が浮き彫りになりました。

課題の捉え方は、他の方法も考えられますが、本紙の3つ目の目的は、今「子どもの居場所」を運営する人や団体、また、今後「子どもの居場所」を運営しようとする人や団体が、活動上の課題に直面したときに、既に居場所の取り組みをされている団体の具体的な活動を知り、課題解決に役立てて頂きたいのです。

課題整理マトリックスの表し方・見方



各事例ごとのマトリックス上の色分けは、濃いピンクが「課題として最も解決しにくい項目」、薄いピンクは「課題はあるが、解決策を見出して運営できている項目」を示しています。

ミッション

組織としての使命を明確にして立ち上げ、運営継続している

活動目標の設定	短期・中期・長期的な目標を立て、計画的に取り組める
組織内共有	活動のミッションや目標を支援者の中で共有できている
役割の設定と運営	ミッションや目標を実現するための体制ができている

ニーズ把握

子どもや家庭の居場所に対するニーズの把握をしている

活動内容	把握したニーズに対応する活動になっている
活動方法	適切な活動ができるような方法を選び、実行できている
支援者の関わり	ニーズに対して適切な子どもとの関わりについて方針がある

人の確保と対応

団体のミッションを理解する担い手・主体的に利用する利用者・協力ネットワーク

担い手	団体のミッションを理解した担い手を必要数確保している
利用者	団体が対象としている利用者が想定した人数、主体的に利用を続けている
協力ネットワーク	活動を適切に行うことを維持・継続するために外部ネットワークを有する

人材養成

ミッションを実現するために必要な人材養成をしている

子どもとの関わり	子どもを理解し、より良いかわり方を模索し学ぶ機会がある
チームアプローチ	団体の支援者が協力して子どもを育む意識や体制を育てている
スキル	ミッションを実現するための担い手が持つべきスキルの向上ができている

団体運営

団体の継続的な運営のための体制をつくっている

運営方針	ミッション・ニーズ・人材など、総合して運営継続する体制づくりや方針がある
資金や場の確保	団体運営を継続的に行う資金計画・場の確保ができている
広報周知	継続的に利用され、支援できるよう活動周知をおこなっている

今後、推進される「子どもの居場所」では、より多くの居場所活動をする団体同士がネットワークを構築し、また、居場所を支える公的機関や福祉・医療・教育など、子どもに関わる関係機関とのネットワークも構築され、より一層、居場所活動が活発に子どもに資する活動に発展していくために活用されることを目的としています。

用語解説

地域ケアプラザ（地域包括支援センター）

地域ケアプラザは、高齢者、子ども、障害のある人など誰もが地域において健康で安心して暮らせるよう、身近な福祉・保健の拠点として、地域住民の福祉・保健活動やネットワークづくりを支援している。活動や交流の場として、多目的ホールやボランティアルーム、調理室などを利用できるほか、ボランティア活動の相談も受け付けている。概ね中学校区圏域程度に1館設置され、令和2年2月現在、市内に139か所。

地域包括支援センターは、介護保険法に基づき、高齢者が住み慣れた地域で生活を継続できるよう必要な支援等を行うことを目的としており、横浜市では原則として地域ケアプラザに設置されている。地域包括支援センターには福祉・保健の専門員が配置され、高齢者の生活全般にわたる幅広い相談を受けるほか、介護予防や権利擁護に関する業務も行っている。

福祉保健活動拠点

市民の福祉・保健活動のための場（団体交流室、対面朗読室・編集室、点字製作室、多目的研修室）や機材（印刷機など）の提供及びボランティアの育成・相談・支援などを行っており、各区に1館設置されている。

地区センター

地域住民誰もが気軽に利用でき、自らの生活環境の向上のために自主的に活動し、及びスポーツ、レクリエーション、クラブ活動等を通じて相互の交流を深めることのできる市民利用施設。

コミュニティハウス

幼児から高齢者までさまざまな市民との交流や自主的な活動が行える身近な拠点として、幅広く利用することができる市民利用施設。

地域子育て支援拠点

地域子育て支援拠点は、就学前の子どもとその保護者が遊び、交流するスペースの提供、子育て相談、子育て情報の提供などを行う子育て支援の拠点で、利用登録のうえ、無料で利用できる施設。また、地域で子育て支援に関わる方のために研修会なども実施している。

放課後キッズクラブ

放課後キッズクラブは、すべての子どもたちを対象に、小学校施設を活用して「遊びの場」と「生活の場」を兼ね備えた安全で快適な放課後の居場所を提供することを目的として実施している。原則として、当該実施校に通学する1～6年生で、利用を希望する児童が対象。

放課後児童クラブ（学童保育）

放課後児童クラブ（学童保育）は、昼間に保護者がいない家庭の小学校1年生から6年生の児童を預かり、地域の理解と協力のもとに、児童に適切な遊び及び生活の場を与え、その健全な育成を図ることを目的として実施している。地域・学校・保護者の代表者等の方々と構成された運営委員会等が運営を行っている。

フードバンク

食品企業の製造工程で発生する規格外品をはじめ、まだ食べられるにもかかわらず廃棄されてしまう食品（いわゆる「食品ロス」）を引き取り福祉施設や生活困窮者等へ無料で提供する団体活動。発祥は米国で40年以上の歴史があるが、日本では2000年以降から活動が行われるようになり、2019年までには、全国で80団体以上が活動している。

おてらおやつクラブ

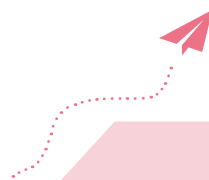
「おてらおやつクラブ」は、全国のお寺と支援団体、信徒および地域住民が協力し、お寺にお供えされるさまざまな「おそなえ」を、仏さまからの「おさがり」として頂戴し、子どもをサポートする支援団体の協力の下、経済的に困難な状況にあるご家庭へ「おすそわけ」する活動。活動趣旨に賛同する全国のお寺と、子どもやひとり親家庭などを支援する各地域の団体をつなげ、お菓子や果物、食品や日用品を届けている。

国際交流ラウンジ

横浜市では、市内在住の外国人のための生活情報提供、相談を多言語で実施するとともに、日本語教室の開催、通訳ボランティアの派遣、日本人との交流活動などを行うため、国際交流ラウンジを設置している。運営には市民活動団体、NPO法人、公益財団法人などがあたり、多くの市民ボランティアが協力している。

国際教室

日本語指導が必要な外国人児童生徒が5名以上在籍する義務教育諸学校には、学校の要請により指導担当者として教諭の加配措置が行われる場合がある。それに付随して、日本語指導を行う専用の「国際教室」が設置される。



Problem Solving

Case 1

おなかも心も満たす居場所

金沢子ども食堂
ホッとサロン **すくすく**

金沢区

課題1 | 広報周知

課題2 | 支援者の関わり

課題3 | 協力ネットワーク

金沢子ども食堂
ホッとサロン

すくすく

おなかも心も満たす居場所



「すくすく」は子ども食堂を毎月1回開催するとともに、ひとり親家族への食料支援として、「ホッとサロンすくすく」も毎月1回開催しています。区内の多くの商店や企業からの応援を受け、また大勢のボランティアが参加して、毎回50人の親子が集い、おいしいごはんと共に楽しい時間を過ごしています。

この方にお聞きました

PROFILE

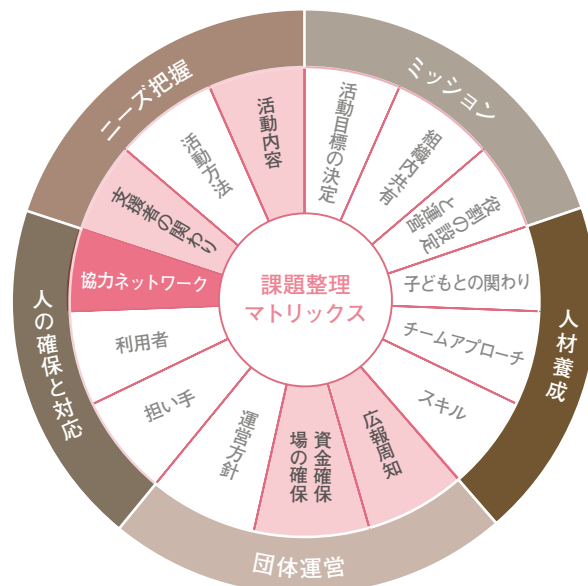
加々美 マリ子さん (62歳)



川崎市生まれ。結婚と同時に金沢区へ転居。3児の母（現在長男34歳、次男32歳、長女30歳）2004年より市内福祉施設に非常勤として勤務。

父がボーイスカウトや青少年に関わる仕事に従事していたため、いつも子どもや大人が入り出するにぎやかな家庭で、地域に尽くすことが当たり前、近隣と助け合うのが日常という環境で育つ。結婚と同時に金沢区に在住。慣れない土地での育児から、子育てサークルを立ち上げ、また、はまっ子のスタッフを勤めるなどしていた。

長男（現在34才）が中1の時、いじめをきっかけに不登校となり悩んでいた時、参加したフリースペースに親子とも救われた。これらの経験により2017年、子どもにとって地域に安心できる居場所が必要と、「金沢子ども食堂すくすく」、ひとり親への食料支援と居場所として「ホッとサロンすくすく」を開設。



活動のきっかけ

家族を救ってくれたフリースペースとの出会い

長男が中学校1年生の時、学校でいじめにあい、それがきっかけで不登校となり、更にそのストレスを親や、弟、妹にぶつけるようになりました。もともと、友達と遊ぶことも好きだった長男にとって、学校に行けないことは苦痛だったと思いますが、家族もまた、長男が激高することに脅えて生活していました。そのような暮らしの中で、フリースペース「金沢虹の会」を知りました。

長男のために訪れた場所でしたが、長男は行こうという気持ちにはなってくれませんでした。でも、殺伐としていた家での暮らしが辛かった弟妹をつれて通いました。みんなで作ったご飯を食べ、遊ぶことで、いつの間にか私も弟妹も笑顔を取り戻すことができました。また、「金沢虹の会」には親の会もあり自分自身の思いをさらけ出し、支援者や同じ境遇の方に受け止めてもらうことができ、励まされ、不安感が和らぎ、心のよりどころとなっていました。

ひとり親家庭のきびしい現実

福祉施設での勤務経験から、ひとり親家庭が様々な課題を抱え生活している状況を知りました。経済的に困窮していて親子とも健康的な生活が送れない、地域で孤立していて友人も少なく、困った時の相談相手がない、子どもが問題行動を起こしても適切な対応ができないなど課題は多様であり時には複合的です。

金沢子ども食堂すくすく

所在地	いきいきセンター金沢（金沢区社会福祉協議会）
URL	https://sukusuku.amebaowmd.com
開設年月日	2017年3月
対象	子ども・親子
開催日時	毎月第1日曜日 12:00～15:00
参加費	子ども無料・おとな300円
参加人数	50人（事前申し込み制）

ホッとサロンすくすく（ひとり親限定の食堂・食料支援）

所在地	いきいきセンター金沢（金沢区社会福祉協議会）
開設年月日	2018年6月
対象	ひとり親家族
開催日時	毎月第3日曜日 11:00～15:30
参加費	無料
参加人数	20家族前後（事前申し込み制）

地域でこうした親子を孤立させないために、困ったことがあれば「助けて」と言える誰かが、それに手を差し伸べてくれる誰かが必要だと思っていました。

子どもたちがより良く育つために必要な経験と仲間

地元の小学校で「わんぱく土曜塾」という体験教室が行われていて、そのお手伝いもしています。現代の子どもたちは、生活の中で、自ら考え、行動する経験がとても少なくなっていると思います。経験の少なさは、考えるチカラ、人とつながるチカラ、コミュニケーションのチカラといった「生きるチカラ」が育ちません。こんなこともやってみようという新しい取り組みへのチャレンジ精神を持つことができないし、仲間と一緒に行動する楽しさも知ることができません。

「わんぱく土曜塾」は、そんな今時の子どもの経験の少なさを補おうと創られた活動です。学校の授業では体験できない、木工、アウトドア、工作、調理、そば打ち等、いろいろなプログラムを実施しています。子どもたちは、いろいろな活動に参加します。

参加する中で、子ども自身が「この活動好きだな」という自分を発見したり、「もっとこんなこともしてみたいな」という想いが生まれて挑戦をするようになります。そんな時、子どもが育っているなと実感します。もちろん、一人で子どもが育っているのではありません。仲間がいるから一緒に育っているし、大人の緩やかな見守りがあるから活動をもっと広げることができ、「すごいね」「頑張ったね」「面白いね」といった声掛けによって、子どもたちは、承認され、達成感を感じながら活動ができていると思います。

【子ども食堂すくすく誕生】 2017年3月

食を通してお腹も心も満たす場所を作りたい！

2016年「子ども食堂」の存在を知り、「食を通してお腹も心も満たす居場所を作りたい」と思うようになりました。地域活動の立ち上げ経験も専門的な知識もないゼロからの出発です。

まず、友人、知人に呼びかけ、ボランティア人材を集めました。

地域の商店を一軒一軒回り、食材の提供をお願いしました。嬉しいことに、少しずつ協力してくれる方や商店が現れるようになりました。場所は、金沢文庫駅近くのデイサービスセンター。施設側の厚意でデイサービス終了後のキッチンとデイルームを使わせていただけることになりました。体制も何とか整い、2017年3月「金沢子ども食堂すくすく」がスタートしました。

【ホッとサロンすくすく誕生】 2018年6月

ひとり親家庭の孤立を防ぎ笑顔でいられる場を創ろう！

ひとり親家庭の暮らしの厳しさが社会の中で顕在化してきたこともあり、子ども食堂とは別に、NPO法人フードバンク横浜の力を借りて、ひとり親家族に限定した「ホッとサロンすくすく」を月1回開催することになりました。ボランティアと参加者が一緒に昼食を作り、プレースペースでは地域のボランティアと一緒に子どもたちが遊び、お母さんは、ネイルやハンドマッサージ、ヘッドマッサージでホッとできる、そんな時間を過ごしてもらっています。

フードバンクや協力してくれる企業、商店からの寄付された、お米、調味料、缶詰、レトルト食品、野菜、おかし、生活用品などたくさんの食材が並び、自由に持ち帰ることができるようにしています。また、子ども服のリサイクルも行っています。

不安な生活を支えることができるよう、子育て相談、悩み相談、時には弁護士との協力で法律相談、無料の歯科検診も開催しています。活動は口コミやSNSで広がり、今では戸塚区や旭区など遠くからも参加しています。

課題1

広報周知

資金・場所の確保

I 活動周知



解決へのアプローチ
how to approach

「利用する人（家族）」「一緒に活動してくれる人」
「活動を応援してくれる人や団体」に周知

想いを持って始めた取り組みですが、実際に活動していくためには、周知も協力を仰ぐことも必要です。周知は、1）利用する人（地域の親子）2）一緒に活動してくれる人 3）後方的に活動を応援してくれる人（団体）だと思います。



具 体 策

広げる・広がる活動の輪

自分たちでの SNS での発信や地域情報誌タウンニュースへの「子ども食堂すくすく」の掲載依頼などが実現し、私、個人からの声掛け以外にも、ボランティアとして協力したい方、食材を提供したいと申し出てくれるお店や企業の方があられました。こうした方々の協力によって、「子ども食堂すくすく」は、月1度、毎月開催。訪れる人たちも、赤ちゃんからお年寄りまで、毎回、50名以上の参加を得ることができています。

現在は、広報紙「すくすく通信」を定期的に発行し、支援してくださっている団体、お店、個人名も掲載して、感謝を伝えとともに、協力、寄付の呼びかけを続けています。

また、毎回、「すくすく」の会場にも食材などの寄付をして下さったお店、企業の名前を張り出し、参加者にも周知しています。

食事の支援だけでなく、地域とのつながりや、友達づくりのきっかけになればと、ひとり親家庭にも参加を呼びかけました。こうした親子の参加を得て、食の提供だけでなく、子ども達も親同士も交流できるよう、ワークショップやちょっとしたイベントをするなどプログラムも工夫につながっています。

Ⅱ 目的を実現するための場所の確保



解決へのアプローチ
how to approach

お腹も心も満たす居場所の確保

子ども食堂を行うときに、どこで行うかということは、とても重要です。身近な場所で、安心して居られる場所であると同時に、調理室が整備されていることや、食事をする以外のプログラムを行うスペースなど、さまざまな要素があると思います。

他にも、ボランティアが食材や機材を運搬する必要があり、駐車場が確保できるか、また、利用者にとって最も支えとなる曜日や時間はいつなのか等、要望としては様々ですが、地域の中に、すべて叶えられる場所を借りることは非常に難しいことだと痛感しています。お金のかかる場であれば、叶うかもしれませんが、それに使える資金もありません。

具 体 策

①協力団体との調整による場の貸与

ボランティアや協力機関も増え、沢山の利用者も得ることができましたが、課題も生まれました。

「子ども食堂すくすく」は、18時オープンとしていましたが、デイサービスセンターをお借りしているため、お年寄りが帰ってからの16時半からでは、どうしても50名分の食事の準備は間に合いませんでした。そこで、金沢区福祉活動拠点「いきいきセンター金沢」に会場を変更することになりました。私たちとしては、お母さんたちが夕食を作る心配をせず、子どもと、そこに訪れる他の親子やボランティア達と、ゆっくり過ごしてもらうことが願いで、それを実現するためには、土曜日の夕食を提供する子ども食堂が良いと考えていました。でも、毎月、土曜日の夕方というのは他の拠点利用団体との調整が必要で、それはありませんでした。実際は、社会福祉協議会と相談の結果、日曜日の昼食提供ということになりました。

②食材や機材の搬入について

多くの食に関する市民活動の方々が悩んでいることではないでしょうか。子ども食堂を行うために、毎回の食材も50食分ある他、食器類や調味料等についても、常に持ち込みをする必要があります。また、食の提供以外のプログラムを行う場合は、その用具も持ち込みます。

こうした物を置いておけるスペース、また、搬入のための車の駐車場など、安定的に借りることができたなら、もう少し、ボランティアの負担も軽減できると思います。私たちには、解決しにくい課題の一つです。

Ⅲ 物資の提供



解決へのアプローチ
how to approach

子ども食堂への地域の理解を広げること、 食材等物資の支援をお願いすること

利用者からの利用料や会費等を頂くことがしにくい活動です。ボランティアはすべて無償ボランティアですが、食を提供するに



も、食材が必要です。また、経済的に困窮している親子の場合は、子ども食堂での食の提供だけでは、支援の不足を実感することもしばしばあります。こういうことは、実際に、子ども食堂を行ってみて気づくことも多いのが現状です。

具 体 策

①地域の商店や企業を訪ねて、活動趣旨を説明して得る協力

立ち上げ期に、近隣の商店や企業を訪ね、活動趣旨に理解を頂き、協力をお願いしました。訪問したすべての機関から援助を受けられるわけではありませんが、知って頂くことの大切さ、何かの時に助け合える関係作りは大事だと思っています。

地元の農家さん、地域のスーパーマーケット、お寺さんからのお供え物の寄付など多様な人や団体に支えて頂いて本当に助かっています。チラシ、ホームページ等に協力して欲しい内容を具体的に示し、寄付の送り先を明記するなど、思い立った時に協力して頂きやすいようにしています。

②食支援団体の活用

「フードバンクかながわ」「食支援ネットかながわ」「神奈川フードバンク・プラス」に支援して頂いています。

ある日、既に子どもが二人いる生活困窮世帯で、妊娠中でもあるお母さんからのSOSの電話があり、一日1食しか、食事ができていない現状であることを聴き、「フードバンクかながわ」より、食材の提供をして頂いたことがあります。

食堂開始以来、南部市場の中の企業から、野菜を毎回頂いています。当初、頂ける野菜は、前日にならないとわからないので、メニューを予め決めるわけにはいかず、柔軟に対処しなければならなかったのですが、今ではメニューに合わせた野菜を揃えていただけるようになり、とても助かっています。

また、近隣の医療機関から寄付の希望を頂き、2年間、ふるさと納税を使って肉を提供して頂いています。こうした寄付は、一緒に活動するわけではないけれど、活動を気にかけて頂いている実感がありとても嬉しいです。

③他の子ども食堂との連携と情報交換

子ども食堂は、新しい取り組みであることが多く、私たちのように、活動してみて、新たに見えてくる課題も多いので

はないかと思います。そういう点では、同じ活動者同士の日常的な情報交換が役立ち、励まされることも多い状況です。

課題2

支援者の関わり

活動内容

I 食の提供以外の子どもへの具体的な支援の必要性の模索と実践



解決へのアプローチ
how to approach

子どもたちにどんな支援が必要なのか？

具 体 策

①子どもの育ちや自立を支えようとする支援

子ども達は食事ができないことのみが課題なのではありません。親の生活状態、世帯の経済的困窮などは、孤立や生活経験の不足を生み、子ども達の育ちや自立に大きな影響を与えています。支援者は、まず、それを理解していることが大切だと思います。

②医療・教育支援の必要性

子ども食堂以外にも、最近は、学習支援活動も地域に増えていると聞きます。こうした支援活動もとても大切だと思います。子ども食堂と同様、学習だけを支援するのではなく、子どもの育ちを支える意識が必要だと思います。子ども食堂をおこなっていて、気づくのは、子どもの健康です。家庭では、規則正しい生活や、病気に罹らないよう予防したり、雇ってしまったら療養したり、本来、当たり前のことを学ぶ場でもあるのですが、それができていない場合があります。「子ども食堂すくすく」では、歯科検診を近隣の歯科医院に協力して頂き行っています。

③様々な人との関わりや経験

人との交流の少なさや生活経験の少なさは、子どもの生きるチカラを育むことを阻みます。だからこそ、子ども食堂で、



さまざまな人に出会い、経験することを大切にしています。

子ども食堂ですから、まずは、健康的で季節感のあるメニューを心がけていますし、食事以外のお楽しみ活動としては、ゲームや工作、豆まきやクリスマス会などの季節のイベントも行います。また、場を貸してくださっている福祉拠点への感謝を込めて、参加の子ども達も一緒に、お掃除をすることも大切な取り組みにしています。

親たちにどんな支援が必要なのか？

具 体 策

①ひとり親家庭の親と子ども達の生活力を高めるために

先に紹介した「ホッとサロンすくすく」では、参加するお母さんの中からボランティアとして食事作りを担う方も出てきました。地域のボランティアさんと一緒に食事作りをすることで調理方法や栄養バランスを考えた献立など大切な生活力を身につける場ともなっているだけでなく、地域の方々との自然な交流が図れています。

②日常生活に必要な食料や生活用品の支援

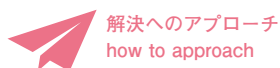
子ども食堂で食を提供するだけでなく、日常生活に必要な食材や生活用品の提供もできるよう心がけています。親が参加していない場合も、子どもの様子で気づけば、子どもに帰ってもらえることもあります。

③生活に潤いや癒しを提供する支援

困難を抱えて生活する人たちは、気分転換をしたり、自分を癒すことが苦手な人が多いです。頑張ることだけでなく、そういう術を身に着けることで、自立した生活続けることにもつながります。だから、子ども食堂のボランティアや協力機関は、調理を担当できる人ばかりではなく、さまざまな人や機関が必要です。美容室、ネイルサロン、カウンセリング団体などに協力をして頂き、プログラムを行っています。参加のお母さんたちにもホッとした笑顔が見られます。

課題3 協力ネットワーク

I 子どもや家族を支えるネットワークを地域で育む必要性



子どもや家族を支えるネットワークを！

利用者の中には、ひと月に1、2回の食の支援では支えきれない困難を抱えた子どもや家族の場合もあります。そういうケースに出会ったら、「私たちはどうすることもできません」で済ませてはいけないと思っています。地域ケアプラザの包括支援センター

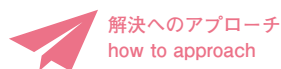
につないだケースもあります。

でも、多くのそういったケースが、今の社会保障のなかでは、具体的なサービスにつながりにくかったりして、困りごとに即対応というわけにいかない場合が多いと思います。

SOSを求めても、どこでも、どうにもならない経験をすると、助けも求めなくなってしまいます。子ども食堂にも来なくなる親子もいます。そういう時、非常に悩みますが、思い直します。複雑多様化する家族の暮らしの困難性に、教育、福祉といった公的な制度やサービスがなかなか届かない。だからこそ「助けてと言える場と時間」「甘えられる場、人」が必要。子ども食堂は続けていこうと。本当は常設の場、いつでもいける場があると良いなあと思っています。自分一人で始めた活動ですが、ボランティアや食材を寄付してくれる商店、企業、NPO、そして何より参加してくれる方々に育てられていると感じています。

これを何とか広げ、専門機関も含め、支えるネットワークが創れたらと思っています。

II 必要な子どもや家族の支援の定着・拡大



「すくすく」に来るこどもたちを見ていると、子ども達にとって、皆でご飯を食べ、体験活動をし、様々な年代のボランティアさんたちとのかかわりを通じて、安心して自分を出し、時には甘え、いろいろな人とかわることで心を豊かに満たせる場になっていると感じます。「すくすく」の活動は月に1、2回ですが、子ども食堂の取り組みがもっと地域に広がれば、それを必要としている子どもは月に何度も利用することができます。町内会ごとであれば、地域の大人が地域の子どもをより知ることとなり、地域での子育てができることになると思います。

もっと、活動が社会に定着し、広がっていくことを願っています。

取材を終えて

加々美さんのお話は、ご自身の子育てで、地域に支えられた経験と福祉施設での勤務経験からとても強い説得力ある「子ども食堂」の意義や価値が伝わりました。

「子ども食堂すくすく」や「ホッとサロンすくすく」を利用する人・共に活動するボランティア・活動を後方的に支援する人や団体にも強い共感があるのだと思います。活動を利用する沢山の親子の心と生活が支えられていることと思いますが、一連のお話を伺ってこうした共感を地域社会に育てていくことこそ、とても大切なことと思いました。多くの課題を乗り越えようとしている活動でしたが、心に残っていることとしては、複合的な困難を抱える子どもや家族に公的な支援が総合的に提供されることは難しい。それを実現するには地域と多様な専門機関の行き届く支援を目指すネットワークだけれど、それが、本当に難しいのだとのつづきでした。

Problem Solving

Case 2

外国につながる子どもたちへの学習支援

友^{ゆう}ゆうスペース

神奈川区

- | | |
|-----|---------------|
| 課題1 | 支援者の関わり |
| 課題2 | 役割の設定と運営 |
| 課題3 | 資金と場の確保 |
| 課題4 | 利用者・担い手の確保と対応 |
| 課題5 | 協力ネットワーク |

外国につながる子どもたちへの学習支援

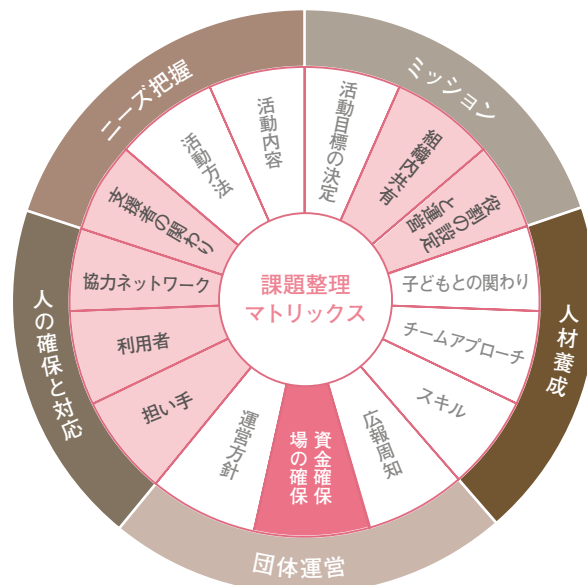
ゆう

友ゆうスペース

地域に多文化共生を広める



友ゆうスペースは、神奈川区内3か所で外国につながる子どもたちを対象に、日本語による学習支援を行っています。学習支援を通して子どもたちが学習への習慣や意欲を身につけるとともに、担い手であるボランティアを通じて地域に多文化共生を広めています。



この方にお聞きました

PROFILE

塚越 恵美さん (67歳)

友ゆうスペース代表。2011年、神奈川県国際協力ネットワークと区役所が共催したボランティア講座「学習支援者養成講座」を受講。地域での多文化共生を実現することの大切さを感じ、拠点づくりの活動に参画。また、外国籍の子ども達への学習支援の必要性や楽しさを感じ、国際協力ネットワークの有志と共に、外国につながる子どもたちへの学習支援グループを立ち上げました。友ゆうスペースとして独立した後、代表を務めています。



南崎 美智子さん (51歳)

夫の転勤で、当時、小中学生の2人の子どもと共に、イギリスで生活をしました。子どもたちは、日本とは大きく環境が違う中、現地の学校の先生や地域の人たちに、お世話になり、無事に生活でき、子どもも成長することができました。帰国後、夫が初めに、友ゆうスペースのボランティアに参加し、その後、出張で活動できない時にピンチヒッターでお手伝いしたことをきっかけに活動をするようになりました。現在は、事務局およびはと友（神奈川県保険・医療・福祉複合施設）教室のコーディネーターを担当しています。



横田 和子さん (69歳)

友ゆうスペース副代表。2005年、小学校教員を退職後、神奈川大学で女性学を学ぶ。同大学の教授の勧めで2011年、神奈川大学の学生たちが主体で行っている外国籍の子ども達を対象にした学習支援の活動のアドバイザーとして活動を始めました。そのつながりで、国際交流ネットワークの活動を知り、メンバーとの繋がりもできて、友ゆうスペースの活動に参加。現在は、副代表と、小学校内教室のコーディネーターを担当しています。



背景

background

神奈川県は横浜市内でも中区、鶴見区、南区に次ぐ4番目に外国人の多い区（2019年約7000人）。横浜市では、外国人が日常生活の困りごとの相談や、外国人同士が交流する場、日本語がまだ理解できない外国人への通訳の派遣依頼ができる機関としての役割を果たす、「国際交流ラウンジ」が18区中10カ所（2019.3現在）整備されているが、神奈川県には整備されておらず、生活のしづらさを感じる外国人や、その子どもがいることが想定されていました。

開設年月日	2017 年 10 月（友ゆうスペースとして独立）
スタッフ	ボランティア 40 名
活動内容	外国につながる子どもたちへの教科学習、日本語学習支援、夏休み宿題教室、夏休み理科教室、保護者の会、新年の会
対 象	小学生（外国籍または日本国籍でも日本語を母語としない子ども）
国 籍	中国（16）インドネシア（4）モンゴル（2）インド（2） ネパール（1）ロシア（1）
URL	https://yuyuspace1014.web.fc2.com/

開催場所	①はーと友教室 神奈川区保健・医療・福祉複合施設「はーと友」
時期・日時	毎週土曜日 10:00～12:00（2014 年 4 月～） ②小学校内教室 区内小学校 毎週水曜日 14:00～16:00（2013 年 4 月～） ③神大寺教室 神大寺地区センター 毎週火曜日 15:00～17:00（2013 年 1 月～）
参加費	無料

活動のきっかけ

2004 年、神奈川区で活動している 5 つの国際交流・支援団体が連携し、区内において多文化共生の実現と国際交流の拠点が整備されることを目標に活動をはじめました。まず、区内在住の外国籍の住民の声や困りごとを知るために、聞き取りなどを進めていましたが、2011 年 6 月、外国籍の子ども達の生活も知りたい、また、生活のしづらさについて支えになればということで、外国につながる子どもたちへの学習支援を始めました。

活動をする中で、外国につながる子どもたちが様々な課題を抱えていることが見えてきました。生活のため夜遅くまで両親が仕事をしている家庭が多いこと。自営業、特に飲食店などを営む家庭については、朝から深夜まで、両親が店にかかりきりで、子ども達の生活が、学校では言葉や文化の課題があり馴染みにくく、家でもひとりぼっちといった環境におかれていること。また、外国人の両親が日本での仕事が軌道に乗るまで、子ども達は母国で祖父母に預けられて育ち、その後、呼び寄せられたものの、両親の日本語力も脆弱なうえ、子どもへの日本語教育も行き届かず、長く、学校になじめないでいる子どもが多いことなど、様々な子どもの課題が見えてきました。

また、仕事はしているものの、保護者の日本語力の弱さに、支援がなく、子どもの通う学校での様々な行事や手続きについて、保護者が理解できないために、その子どもたちの学校生活に、更に支障が出るなどといったことが起こっていることもわかってきました。こうした外国につながる子どもたちの課題が浮き彫りになる中で、学習支援だけではなく、こうした子どもたちが安心できる居場所が必要であると考え、2017 年、5 つの団体のネットワークの総会で、ネットワークの一部門である学習支援部門が、独立する形で「友ゆうスペース」を設立しました。

また、ネットワークの目的としている、多文化共生の拠点整備についても、「神奈川区に多文化共生をすすめる会」として独立し活動を続けています。



私たちのミッション

活動目標

外国につながる子どもたちへの学習支援を通して、
子どもたちが安心して学校生活を送れるようになること

友ゆうスペースを利用する子どもたちの家庭は共働き家庭がほとんどです。保護者の日本語力も脆弱な場合が多く、労働時間も長く、時間や心の余裕がありません。忙しいから子どもとの関わりは少なくなり、子どもたちは、家庭でも、地域でも、学校でも孤立しがちになります。言葉の問題を残しつつ、子どもは常に不安な気持ちを持ちながらの生活が続きます。子どもにとって、自分のことを見守ってくれている人、理解してくれる人が必要です。困ったときには、安心して助けを求められる大人の存在が必要です。

友ゆうスペースでは、ボランティアが、子どもたちとの信頼関係が築けるよう、子どもたちが安心して、ボランティアに声をかけられ、困ったことが言えるようになるよう心掛けます。

学習支援活動としては、教科学習という点では、教師の資格があるボランティアもいますが多くは素人で教える力は十分とは言えないと思います。また、日本語指導の資格を持っている人も少数なので、こちらも、専門性が十分あるとは言えません。それでも、家に 1 人であることの多い子どもたちが楽しみに休まず来てくれます。学校ではなかなかコミュニケーションが取れない子どもでも、ここでは同じ母語の子と母語で思いっきり話せたり、ケンカをしたり、子ども同士の繋がりができます。こうして、私たちは、活動の中でミッションを果たしていこうとしています。

外国につながる子どもたちを支える地域のチカラを育てたい

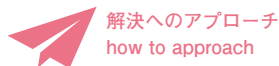
外国籍の家族が日本で生活していくことは、簡単なことではないと、学習支援活動を通して痛感しています。子どもの希望とは無関係に、小学校高学年や中学生で、日本で暮らすことになった子どもは、学習面でも難しくなっており、友人関係も幼児期とは異なる複雑さが要求されます。その中で、言葉の問題があれば、勉強への意欲も大切な友人関係さえ築けなくなり深刻です。

地域で、私たちの学習支援の場も含め、地域の様々な人から、語りかけられ、見守られていたならば、子どもたちにも、自分のことを発信するチカラ、考えるチカラが身についてくると思います。そうした経験を繰り返すことは、生きるチカラにも必ずなると思います。私たちの学習支援活動は、学力の向上にはそれほど役立たないかもしれませんが、彼らを受け入れ、安心できる場として、地域の中にあり続けたいと思っています。

課題1

支援者の関わり

I 子どもの生活支援



学習支援をしているから気づく、必要な子どもへの生活支援

具 体 策

①限界があるなかで必要と感じる「食」の支援

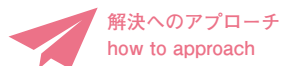
忙しく働いている保護者が多く我が子への配慮も不十分な家庭があるのも現実です。朝ご飯を食べていなかったり、教室にパンを買ってくる子ども、夕飯も一人で食べることがある子どもなど、さまざまな子どもがいます。ボランティアスタッフは、それがわかっているし、気になっていますが、今はおやつを出すくらいしかできていません。

②生活経験の少なさによる子どもの生活しづらさ

参加している子どもに、こんなエピソードがありました。夏休みに、小学校から横浜市の18区のうち訪れたことのある区に印をつけるという宿題が出たそうです。でも、その子どもは、神奈川区と西区にしか行ったことがない。また、ある中学生は、「美術館に行ってみよう」という宿題が出たときに、生活の中で体験的なことがほとんどなく、美術館の場所さえ分からなかったため、ボランティアと一緒に美術館に行ったとのこと。子どもたちの多くが、学校と家と親の働く場くらいしか知らないと思います。

宿題ができなかった子どもの寂しさもありますが、エピソードのなかで、スタッフはこうした経験の少なさが将来に夢を持つことなども阻むのではと感じました。もっと様々な体験を子どもに提供することも考える必要があると思うのと同時に、子どもとの対話の中で、少しでも補えればと考えています。

II 保護者のサポート



保護者にも地域とのつながりを

保護者会を開催して、交流を進めるとともに、相談事にも乗るようにしています。

国際教室のある学校も個別の子どもにしっかりかかわる時間が不足しているし、外国籍の子どもが少数の学校は、国際教室がないのでますます個別の生徒、まして、保護者への支援は届かないでしょう。保護者も地域とつながる機会がなく、孤立し、必要な情報さえ得られないことも多いはずです。

また、なかなか自ら自分の事を語るという機会が少なく、それが地域と繋がりにくくしている場合もあります。今年の保護者会では、それぞれの国のお正月のようすを話してもらい、その家族を理解してもらうきっかけとなり和やかな時間を過ごすことができました。

課題2 役割の設定と運営 組織内共有

I ボランティアの役割



子ども達との信頼関係を創れることを第一に

具 体 策

①担当制を決めたマンツーマンでの対応

友ゆうスペースは、現在 40 名のボランティアが登録しています。年代は高校生から 80 歳代まで幅広く、資格は特に必要としていません。子どもと楽しく勉強できれば OK です。時間もできる範囲で手伝っていただければ良いことにしています。基本はマンツーマンで対応し、なるべくそれぞれの子どもには同じボランティアがついて、関係性が作れるよう配慮しています。



はーと友教室



学習はマンツーマンで

②配慮の必要な子どもに適切な対応を

現在、区内3か所で学習支援をおこなっていますが、それぞれの教室にコーディネーターを配置し、その日の参加する子どもとボランティアの配置を考えています。

年1回の総会のほか、全体での定例会は年3～4回実施し、毎回、終了後に振り返りをして、気になる子どもの状況や課題について共有しています。特に、課題のある家庭の状況については、子どもへの配慮を適切に行うために、担当スタッフの間で共有しています。

Ⅱ 組織整備と3つの教室に分かれた情報共有法



組織体制の整備をしました

小さな組織ですが、3か所の教室を現在運営しています。これを実現するには、役割の明確化とその役割を果たすキーパーソンを決定する必要がありました。また、定期的な会議の開催も決めています。区内で外国籍の子どもの多い地域が他にもあり、教室の運営ができないかと要望を受けたことがあります。現時点では、3教室を同時に運営できている状況です。

具 体 策

①3つの教室の責任者に代表・副代表・事務局を配置

3つの教室を運営していくためには、場を提供して頂いている学校や関係機関との調整が必要になります。また、ボランティアの確認や、参加の子どもの把握なども行わなければなりません。そのため、それぞれの会場に責任者が必要になり、3名の責任者を配置しました。また、これらの責任者は、基本的には毎回ボランティアが、担当の子どもに対応することになっているので、そういったコーディネートもしています。

②責任者会議の開催

日常的に、3名の責任者は個々の教室、また全体の教室の状況を把握するように努めています。年一回の総会の他、年に3回～4回定例会議を開き、各教室の運営上の課題や気

になる子どもの対応など共有するようにしています。

課題3

資金と場の確保

I 安定的な運営



安定的な運営のための財源の確保と外部協力の必要性

具 体 策

①ボランティア自身が納める会費が主な財源

現在の運営は区社協の助成金9万円/年と、ボランティアが納める1000円/年の会費（高校生500円/年）が運営資金の全てです。ボランティアの中には、バス等を利用して活動している人もいますが、交通費の支給はできません。イベントの経費としてはロータリークラブの助成金を当てています。また、おてらおやつクラブさんからのお菓子をいただいています。

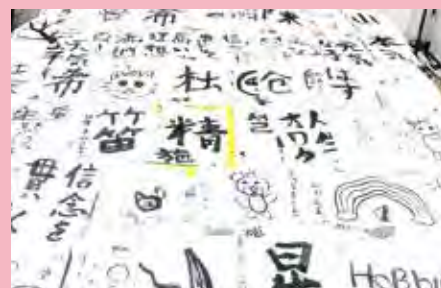
②場の継続使用のために続ける努力

小学校とは毎年2月に次年度のお願いをして継続できるようにしています。神大寺教室は地区センターとの共催事業のため、場所は確保されています。神奈川区保健・医療・福祉複合施設「はーと友」では、事務局が6か月前に予約を取って利用をしています。最近は使用する団体も増え、現在は毎週使っていますが、利用者連絡会で同じ団体の利用を指摘する声もあり今後も継続して利用できるかが少し心配な状況です。責任をもって活動を続けていくには、資金もですが、場は本当に重要です。

理想は常設の拠点があれば一番良いと思います。ラウンジがほしいです。立派な施設でなくてもどこかの施設の一部屋でも使えないかと思っています。地域に理解して頂く努力を続けていかなければと思っています。



今年の書初め大会

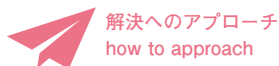


多文化の作品が完成

課題4

利用者・担い手の確保と対応

I 更に求められる支援の必要な子どもの発見と教室利用の促進



広報ツールを活用した支援の必要な子どもや家庭への活動周知

神奈川区国際協力ネットワークから独立した「神奈川区に多文化共生をすすめる会」が神奈川区子育て支援拠点「かなーちえ」と協力して1冊のファイルにまとめた外国につながる親子に向けての地域情報を、神奈川区内の小中各学校で子どもや保護者への対応、相談、情報提供に活用してもらうよう配布・更新しています。そこに友ゆうスペースも紹介されています。しかし支援を必要とする子どもにきちんと情報が届いているかわかりませんし、教室から遠い地域の子どものには対応できていないのが現状です。

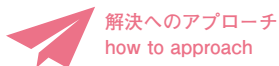
社協の協力によってボランティアが参画

ボランティアには幅広い年代の方がいます。比較的年齢の高い方が多く、子どもにとってはおばあちゃん、おじいちゃんに勉強を見てもらい一緒に遊んでもらっている感じです。区社協のボランティアセンターが積極的にボランティアを紹介してくれています。神奈川区の広報にも載ったので3名新たなボランティアが加わりました。

課題5

協力ネットワーク

I 福祉関係機関・福祉関係者とのつながり



区社協とのつながり、主任児童員とのつながりで子どもの情報を得る

区社協で年1回、主任児童委員と子ども食堂や学習支援、居場所などの団体の情報交換会があり、そこでつながった主任児童委員と気になる子どもの情報共有をしています。

先日とも以前、友ゆうスペースに通っていて気になっている中3の女の子が、定時制の高校を受験する気持ちになっていることを主任児童委員さんから聞き、安心したところです。

地域の社会資源を活かして 子どもたちの生活しづらさを支える

友ゆうスペースの対象は小学生までですが、中学に進学した子どもも何人か参加しています。ここでは中学生の進学指導までは自信がないので、中学生には県民サポートセンターで活動している他の団体や他区の国際交流ラウンジを紹介しています。

国際教室の先生や国際教室のない小学校では、児童専任の先生とは連絡を取っています。小学校内教室では、担任の先生も時々来ていただいているのですが、もっと連携ができて、様子を観て頂けるようになったらと願っています。

取材を終えて

■外国籍の子どもへの日本語支援について

- ・来日直後の母語支援・日本語支援が非常に脆弱なこと
- ・生活言語ができていると学習言語もできるかのような誤解が教育現場にあること
- ・社会保障でも担うべき、日本語指導をボランティアに頼っていること

■居場所の必要性

- ・多様な人との関係性を持つために
- ・不足する生活経験を補える場として
- ・徒歩圏内で気軽に行ける場として

■必要な居場所を社会で守っていくためには

- ・行政の手助け（財政的・人材的）

友ゆうスペースに限らず、今回の取材団体は、一様に、社会的な課題を発見して居場所を創り、更に、その運営を続ける中で新たな課題を発見し、それを仲間と共に如何に解決できるか考え行動していました。

ここで、語られた内容は、この先、個々の団体のみで解決するのではなく、社会全体の課題として捉えるべきことと思います。

Problem Solving

Case 3



横浜・東戸塚を拠点とするフリースクール

おっち一塾

戸塚区

課題1	利用者の確保と対応
課題2	担い手の確保と対応
課題3	資金と場の確保

おっち一塾 地域の人々との関係性と心を育む“居場所”



火曜日スタッフ

JR 東戸塚駅隣接のビルの中にある「とつか区民活動センター」のミーティングルームが活動場所です。

「“学ぶこと”の喜びを分かち合い、実感してもらいたい」という願いをもって子どもたちに寄り添い、手助けする「おっち一塾」。オープンスペースでは、思い思いの対話があり、学ぶことへの関心と意欲が育まれています。

この方にお聞きました

PROFILE

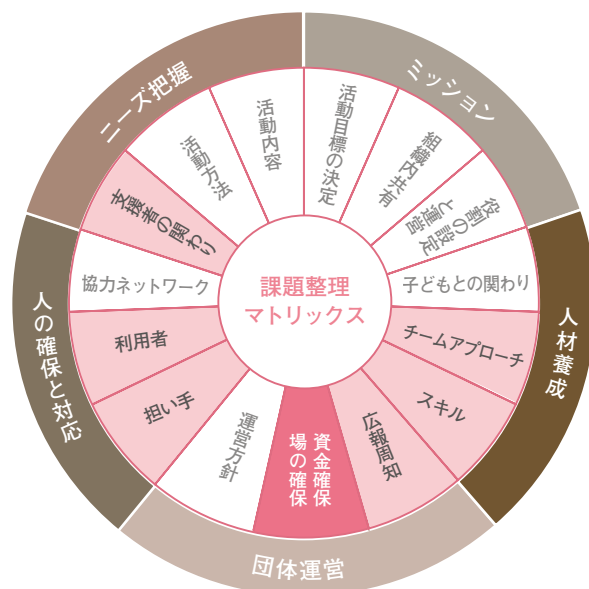
落合 嘉弘さん (72歳)

元神奈川県立高校教員。2008年 不登校生支援のボランティア団体「おっち一塾」を立ち上げる。2019年塾長を退き、顧問となる。



但馬 香里さん (46歳)

落合先生が紹介された新聞記事を見て、「いつかこの方のお話を聞いてみたい!」と切り抜いて大切に保管したことがきっかけになり、2年前におっち一塾を見学した日にとっても共感したことから活動を始める。たくさんの子どもたちに「あなたはあなたのままでいいんだよ」と伝えていきたいと思っている。元ウェディングカメラマン。現在、グリーフサポートが当たり前にある社会を作る一般社団法人リヴオンの事務局で勤務。



活動のきっかけ

2000年頃から、学校現場にも大きな変化が生じてきました。人件費削減、個人情報保護が求められるようになり、教員は事務業務が急激に増えました。また、自宅に持ち帰って作業することもあった成績処理等個人情報に関わる仕事を学校から持ち出すことが出来なため、授業の空き時間や放課後にそれらの業務を行うこととなりました。次第に、教員と生徒とが共にいる時間が減ってくるという結果をもたらしました。

一方、学校だけでなく、家庭や社会も変化し続け、子どもの育つ環境に様々な課題が顕在化し、「生きづらさ」を抱える生徒たちの姿を見ることが増えてきました。子どもは“将来の宝”です。そんな“宝”を放置しておいていいのだろうか？そんな子どもたち・生徒たちのために「何かしなければならぬ。何ができるのだろうか？」と考えました。子どもたちが困ったり、悩んだりしているなら、そっと寄り添い、手を差し伸べることは大人の努めではないでしょうか？

退職後、大学生になった教え子たちと共に、そんな思いをもって「おっち一塾」を立ち上げました。教員時代、さまざまな生徒と関わりました。今から30年ほど前から徐々に不登校の生徒が増え始めました。それまで、「生徒指導」といえば暴力や喫煙等問題行動をとる生徒への対応でした。このような問題行動は、他の生徒への影響もある為、教員もすぐに対応してきました。しかし、不登校の生徒は学校に来ていないわけですから、教員の対応も遅れがちでした。その結果、修得単位不足で進級・卒業が出来ず、多くが「退学」の道を選んでしまいます。退学の結果、さまざま

所在地 戸塚区川上町 91-1 モレラ東戸塚 3 階とつか区民活動センター
URL <https://occhijuku.weebly.com/>
開設年月日 2008 年 5 月
スタッフ ボランティア 40 名
活動内容 ☐ 不登校児童・生徒への学習支援
☐ 学習遅滞児童・生徒への学習支援
☐ コミュニケーションの不得意な子への支援
火・木曜日 16:00-18:00（開塾日が祝日の際はお休み）
土曜日 13:00-15:00

登録料 1,000 円
会費 10,000 円 / 1 カ月（会費の納入法は相談に応じます）
☐ 外国と関わる子どもの日本語支援
火・木曜日 16:00-18:00（開塾日が祝日の際はお休み）
土曜日 13:00-15:00
登録料 1,000 円 会費なし
☐ 不登校生・親の会を隔月で開催・イベントの開催

な体験、社会との関係性が希薄となり、自信を持って社会に出にくくなります。

学校に行けなくなる理由は千差万別。悩みも様々です。個々の生徒・子どもたちの問題解決のために、その子に寄り添う存在が必要だし、誰かが手を差し伸べていく必要があります。「おっちー塾」の活動目的（ミッション）は、発足当時からずっと変わらず「“生きづらさ”を抱える子どもに寄り添う」です。常に、そこからスタートして、ボランティア・スタッフ皆で、その在り方を考え続け、子どもたちと共にいます。

課題1 | 利用者の確保と対応

I 不登校児やコミュニケーションの苦手な子どもの利用促進と継続



不登校児が行きたい・行きつづけたいと思う「居場所」に

立ち上げ当初は、子どもたちが居場所に訪れることはなく、閑古鳥。教え子たち、先生仲間で、手伝うよと言ってくれた人など、スタッフのたまり場化していました（笑）。それが、徐々にHPや口コミで広がって、入塾希望の問い合わせが沢山入るようになりました。子どもたちが行ってみようと思う居場所。行きつづけたいと思う居場所はどんな居場所かとボランティアと共に考え続けてきました。

具 体 策

①基本はボランティアと子どものマンツーマン対応で

学校に行っていない子どもたちは、「勉強が分からない」「人とのコミュニケーションが苦手」など様々な不安を抱えています。おっちー塾は基本的にはマンツーマン。一人一人の子どもに寄り添いながら「解る」ことを通して喜びと自信をつけさせたいと考えています。

②教科学習のみではなく、経験と仲間づくりを

おっちー塾では子どもの自主性を大切にしています。その日の活動は子どもたち自身が決めます。教科学習はもちろん、

おしゃべりしたい、遊びたいという希望に応じて対応します。また、夏祭りやクリスマス会などのイベント、料理体験や働く場の見学ツアー、宿泊体験など、1年間で様々な体験を通して、豊かな心や笑顔を作っています。

③子どもたちの小さな変化に気付き、共有する

普段の活動時間や行事への参加によって、何もしゃべらなかった子が少し話したり、笑顔を見せるようになったり、狭かった話題が少しずつ広がったり・・・「小さな変化」がでます。スタッフはその「小さい変化」に気づけるように努め、皆で共有するようにしています。その他、慣れてきた生徒に関しても、元気があった・なかったはもちろんのこと、マスクを外さなかった、目が合いにくかった、友だちとトラブルが起きたようだ等々、子どもたちの変化や様子を共有しています。

情報共有のために毎回の活動後にショートミーティング、月に一度のロングミーティングを実施しています。

④スタッフにだから打ち明けたことの対処

子どもがようやく口にした、心の不安や、葛藤、悩み等について、スタッフの間での共有はしますが、何かの危険につながるということ以外は、保護者にも伝えることはありません。スタッフは子どもの声を傾聴し、信頼関係を一番大切にしています。

⑤いつもいるという安心・迎えてくれると思える信頼

子どもたちにとって、スタッフがいつもいてくれて、迎えてくれる存在になることで大きな安心を与えられると感じています。そして、大人の価値観を押し付けられることなく、何を話してもいいんだなと思える、ありのままの自分を受け入れてくれる、そんな存在になることで、子どもたちにとって安心で安全な居場所になるのだと思っています。

II 外国にルーツを持つ子どもの利用



更に努力し続けている外国にルーツを持つ子どもの支援

日本語を母語としない子どもたちにとって一番辛いことは、
・友達とうまくコミュニケーションがとれない
・学校の授業がわからない
・社会生活がスムーズにいかない

子どもたちに「日本語」をいち早くマスターしてもらう手助けをしたい。そして、子どもたちの可能性を広げたいと思い、日本語支援の活動にも取り組んでいます。

外国にルーツを持つ子どもは年々増えていると思います。しかし、不登校の子どもたちほど、問い合わせがないのが現状です。まだまだ、対象となる子どもたちやその保護者に情報が届いていないのかもしれません。広報については、まだ途上にあります。

Ⅲ 保護者にとっての居場所



保護者にとっても「悩み」「辛さ」を吐き出せる場

自分の子どもが不登校になると、多くの母親は「ママ友」を失います。だからこそ、同じ悩みや不安を共有して「自分だけではない」という共感を保護者の間で持てることや、自分の気持ちを聴いてくれたり理解してくれる存在や場は貴重で重要なことです。

入塾していない不登校の保護者でも「親の会」は広く参加可能にしています。

具 体 策

①入塾時、保護者面接の実施

入塾希望の際には、必ず保護者との面接を実施しています。多くは母親との面接になります。不登校になった経緯や家庭での様子を丁寧に聴いています。

不登校について勉強している母親も多く、子どもが学校に行けなくても、家庭で学校へ行くことを強要するなどの登校刺激を与えない方が良いこと等理解している人がほとんどです。しかし、父親が共感できなかったり、祖父母から孫の不登校を責められた末、母親が家族の中でも孤立している等のケースもあります。母親が抱える様々な苦悩を知る場にもなり、寄り添い、ともに子どもを育てていくことの大切さを改めて実感

する時間にもなっています。

②塾生以外の保護者の参加もOKに

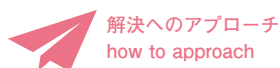
おっち一塾の塾生以外の子どもの保護者の参加も可能にして、親同士の交流を進めています。孤立する保護者、子育てに悩みを持つ保護者が少なくなることを願っています。

課題2

担い手の確保と対応

チームアプローチとスキル養成

I おっち一塾のミッションに共感し 共に活動するボランティアの確保



活動12年「おっち一塾ボランティア」の今

発足から12年。おっち一塾のボランティアスタッフは、登録約40名、実働は20名程度です。おっち一塾のスタッフは全員がボランティアです。大学生・社会人・定年退職後の人が、それぞれ3分の1ずつという感じです。

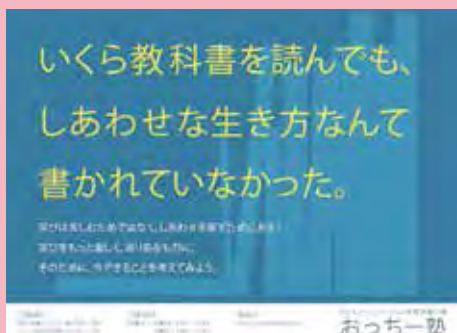
様々な年齢や立場の人が出会い、お互い影響や刺激を与えあう場になっており、スタッフにとってもおっち一塾は大切な「居場所」になっています。

具 体 策

①ボランティアスタッフ面接

おっち一塾が、単に学習支援を進めるところではなく、子どもの主体性「やりたい」を育てるところであることを伝えます。やりたいは「勉強・遊び・対話」なんでもよし。

そして、一番大切にしているのは子どもたちが安心して過ごせる居場所作りであること、おっち一塾が大切にしているミッ



おてらおやつクラブからのお菓子の寄付



社会科見学

ションや願いに共感してくれる人にボランティアスタッフになっていただいています。

また、面接時には、「子どもたちに大人の意見を強要しない」「子どもをありのままに受け入れる」「子どもの事情について根掘り葉掘り聞かない」等、おっち一塾の約束事を必ず伝え、理解していただいています。

②専門的な知識やスキルを活かしたい希望者に

おっち一塾は、外国にルーツを持つ子どもの支援も行うので、「日本語を教える技能」など専門的な知識やスキルを活かしたくて、ボランティアを希望される方が来ることも時々あります。もちろん、それは塾として有難いことですが、おっち一塾が大切にしているミッションや約束事を守ることの方がもっと大切です。時に、自分を活かすのはここではないと思い離れていく方もいますが、繰り返しおっち一塾のミッションや約束事を確認していくことで、団体内で大事にしているボランティアスタッフ像が共有できていると感じています。

Ⅱ ボランティアスタッフの育成・チームアプローチの推進



解決へのアプローチ
how to approach

おっち一塾ボランティアスタッフが集まり、共感的な活動ができてくることで、ボランティアスタッフが、自ら学び考える機会を求める声も挙がってきました。

具 体 策

①日本語教育研修

外国にルーツを持つ生徒（日本語が得意でない生徒）への学習支援方法について、ボランティアスタッフ自らが支援方法を考えてサポートしてきましたが、正しい教育法について学びたいという声が挙がり、専門家を招いて実施しました。言語学習の目標をどこに置いたら良いのか等、講師と対話しながら

主体的な学びの場とすることができました。

②ボランティアスタッフ宿泊研修

子ども達により良いサポートをしていくために、自分たちに何が必要なのか考え、共に過ごす宿泊研修。個性豊かなメンバーが学びの材料を持ち寄り、教え合い、吸収し合う形式で実施します。また、日本の学校教育の根底にあるものは？いじめの原因になる思想は？等、日常の活動時間では話し合えないこともとことん話し合います。

こうした時間は、スタッフ間の結束を強くし、子ども達のためのおっち一塾ですが、ボランティアスタッフ自身のためにもおっち一塾が大切な存在であることを確認できました。

Ⅲ 無償ボランティアスタッフの活動負担



解決へのアプローチ
how to approach

ボランティアスタッフには交通費のみ支給しています。普段の活動はもちろん、団体を運営していくための労力は、それぞれのスタッフが可能な時間と可能な力を持ち寄ることで、実現しています。安定的に団体の活動を行っていくためには、ボランティアスタッフの負担はかなりのものです。

Ⅳ 団体の運営・継続のためのリーダー的スタッフ



解決へのアプローチ
how to approach

創設者の落合は、現在顧問という立場になり、塾長は但馬香里が担っています。また、運営管理チーム、コミュニケーションチーム、会計チーム、渉外チーム、広報チーム等で構成する運営チームを作り、組織として団体運営していく体制づくりを進めています。

塾長の但馬は、おっち一塾のことが紹介された新聞記事を見て、関心を持ち、おっち一塾を訪れました。落合の教え子で始めたおっち一塾は、現在ではHPで見ついたり、大学のボランティ



木曜日スタッフ



土曜日スタッフ

イベントで紹介された等、活動に参加するきっかけも広がってきています。

責任ある取り組みを継続していくためには、こうした主体的に活動に参加するボランティアスタッフの中から、リーダーを受け継いでいくことが必要だと思っています。

課題3 資金と場の確保

I ミッションに対する活動のための資金不足



解決へのアプローチ
how to approach

最も解決しにくい団体の課題だと思っています。助成金の申請は毎年していますが、該当する助成金を探したり、申請手続きをしたりするのは、時間的にも非常に厳しいことです。更に申請しても受けることが出来ない場合もあり、そういった年は財源的に厳しくなります。

現在は生徒からの会費や神奈川子ども未来ファンドからの助成金などもありますが、外国にルーツを持つ子どもや経済的に支払いが難しい家庭からは会費免除や減免しているケースもあり、スタッフの交通費やイベント開催費等、団体を継続していく為に必要な活動資金の確保は常に大きな課題となっています。

II スタッフの負担を軽減するための資金不足



解決へのアプローチ
how to approach

私たちのような団体に、定期的な安定した補助金が提供していただけるような仕組みがあればと思います。若い学生や20代

のスタッフだけでも、アルバイト代程度の金額が提供できれば、もっと活動しやすくなるし、様々な居場所も増えるのではないかと考えます。

III 安定的な場を確保するための資金不足



解決へのアプローチ
how to approach

開設当初、マンションの一室を借りていたことがありますが、ひと月10万円の家賃はとても支払い続けることができず、今は区民活動センターのスペースを無料でお借りしています。

取材を終えて

ミッションが明確で、ボランティアスタッフにも浸透しているため、非常に安定的な活動が継続して行われています。その活動が、生きづらさを抱える子ども達や、その保護者を支え、自分を見出し、生きる意欲が持てるよう、柔軟な場と関係性が築けています。

志ある10代から70代まで、ごちゃまぜ感のある多世代の人があつまるところは、利用する子どもに限らず、ボランティアスタッフにとっても居心地の良い、大切な場となっているというおち一塾。子どもたちにとって、地域にとって価値ある社会資源だと思いました。課題解決の努力を様々されていることを紹介しましたが、資金の問題は、おち一塾のみの問題と捉えず、解決策を探る必要があるかと思っています。



<https://occhijuku.weebly.com/>

Problem Solving

Case 4

都筑冒険あそび場

まんまるプレイパーク

都筑区

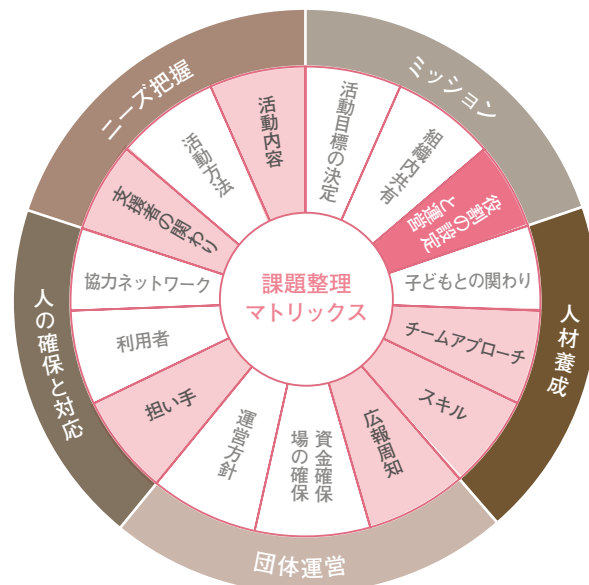
- | | |
|-----|-----------|
| 課題1 | 担い手の確保と対応 |
| 課題2 | 広報周知 |
| 課題3 | ニーズ把握 |
| 課題4 | 人材養成 |
| 課題5 | 役割の設定と運営 |

まんまるプレイパーク

子どもが夢中で遊べる場所を



鴨池公園まんまる広場周辺は港北ニュータウンの中央に位置し、住民の出入りが多い地域です。特に遊具などがあるわけではありませんが、日当たりのよい、緑に囲まれた広い空間は、新しく越してきた親子も気楽にふらっと立ち寄れる雰囲気があります。この公園の広場で、誰でも参加できる、自由な遊び場、まんまるプレイパークが開催されています。



活動のきっかけ

子育てサークルの仲間と「もっと自由な遊び場があったら、自分たちの子どもがもっとのびのび育つよね」と考えるようになり、どこかにそういう場所はないかとリサーチしたところ、「世田谷プレイパーク」を見つけました。早速見学したところ、子どもがのびのびと育つ場として、プレイパークへの関心が高まり、自分の住んでいる都筑区でもプレイパークを創りたいという思いが膨らんでいきました。

そのような時、横浜でプレイパークをつくらうネットワーク（現在のNPO法人YPCネットワーク^{*1}）があることを知りました。YPCネットワークの方々との出会いによって、プレイパーク立ち上げについての様々な相談をすることができるようになり、知恵と

この方にお聞きました

PROFILE

山崎 佳之さん（40歳）

プレイリーダー。ニックネームは「はんす」。もともとは役者志望で子ども向けの芝居もやっていたが、子どもの勉強をしたいと思い、いろいろな講座を受講する中で、たまたま、まんまるプレイパークと出会い、それを機に活動を始める。プレイパークでは、大きい子どもが小さい子どもの面倒を自然に見ている関係性や環境があることに感激して、「もし結婚して子どもができて、ここなら元気に子育てして生きていける」と感じ、10年間まんまるプレイパークで活動が続けている。



山崎 雅美さん（40歳）

プレイリーダー。ニックネームは「まさみっちょ」。保育士としての経験をもつ。夫の「はんす」とはこのプレイパークで出会い結婚。結婚式もこの公園で挙げた。公園そばの住まいで暮らしながら、ふたりのお子さん（2歳・4歳）もプレイパークで週の大半を過ごしている。「大人に遠慮しないで、思いっきり遊んで欲しい」という思いを大事にしながら、プレイパークでの活動を続けて13年になる。



西田 清美さん（54歳）

独身時代に実家大阪で冒険あそび場の立ち上げを手伝ったことから「子育ては、こういう場所をしたい」という強い思いを持った。世田谷プレイパークを見学し、関心を深め、緑区の三保ねんじゅ坂プレイパークに世話人として参加。自分たちのまちにも是非プレイパークを作りたいと、様々な団体、関係機関の協力を得て、約3年をかけて、2005年12月まんまるプレイパークを開設。代表を務める。2019年、大阪への転居に伴い、代表を交代。



実施場所	鴨池公園まんまる広場（都筑区荏田3丁目）
活動日	毎週月曜日・火曜日 11:00～17:00 毎月第2・4日曜日 11:00～17:00 毎月第4金曜日 14:00～17:00
URL	http://manmarupp.ciao.jp/
開設年月日	2005年12月
利用者数	およそ100人（イベント300人）

利用料	無料
活動内容	☐ プレイパークの運営 ☐ 不定期イベントの開催 ・青空フェスタ ・おそとで紙芝居 ・青空ヨガ ・絵の具あそび など

力を借りて準備を進めていきました。

立ち上げには、プレイパークを創ることに共感して協力してくれるメンバーが必要でしたが、当時、子育て中のママたちの講座を企画した仲間、まんまる広場で一緒に活動していた子育てサークルの仲間、都筑区の子育てフェスタ「子どもの遊び場について考えよう」に集った人たちなど、子どもや子育てに関心がある人、今、子育てをしている人などに声をかけ、メンバーになってもらうことができました。

更に、都筑区の助成金を受けて連続講座を開催し、プレイパークに協力してくれる仲間を集め、自分の子どもの通う小学校のPTA会長、地域の自治会の方、鴨池公園愛護会（当初は、愛護会の中の一部の人や知り合い）の協力も仰ぎながら、まんまるプレイパークを立ち上げることができました。

活動の目的

- 1) 「あれはダメ」「こうしなければならない」などの禁止事項や決まり事が極力ない、「子どもの自由な遊び場」づくり
- 2) 子どもひとり一人の個性が発揮できる場づくり「そのまんまで大丈夫」というメッセージを常に発信
- 3) 頑張らない子育てを親たちと共にする場づくり
- 4) 誰もがその人らしくいられる地域づくり

課題1 担い手の確保と対応

I プレイパークの中心的キーパーソンの確保



解決へのアプローチ
how to approach

継続的にプレイパークを運営するプレイリーダーと世話人

具 体 策

① 同じプレイリーダーが継続的に活動することでの安心感

プレイリーダーは遊びのスペシャリストで、プレイリーダーが運動の機会を作りだし、魅力的な遊びを考えることによって、子どもが自然と遊びに入るようになります。また、子どもが遊びを楽しむには、プレイリーダーも本気になって子どもと遊び、子どもと一緒に自身も思い切り楽しむことで、子どもとの信頼

関係を深めていきます。子どもは、遊びを通して、友達を思いやる心や社会のルールなど、様々なことを学んでいきます。プレイリーダーは子どもの成長を健やかに促し、楽しませる役割を担う仕事であり、その存在はとても重要です。

「まんまるプレイパーク」では、活動日はプレイリーダー2名と世話人（ボランティア）1名以上で活動しています。プレイリーダーはYPCが雇用し、市内の各プレイパークに派遣されるという形態をとっていますが、まんまるでは主に山崎夫妻がプレイリーダーとして活動しています。そのため常にプレイパークや参加する子どもの様子に気を配ることができ、世話人との関係も継続していて、みんなが安心して活動に参加できるプレイパークになっています。

② 子どもの成長と共に保護者が「世話人」に

プレイリーダーは仕事として活動していますが、世話人は市民が行うボランティア活動です。世話人は常時30名程度いますが、入れ替わりはあります。直接応募してくれることもあります。子どもが小さい時、利用者として参加していた母親が、一緒に遊んでいた子どもたちのことが気になり、子どもが大きくなったのを機に世話人として活動に参加するケースもあります。そのため活動時間は個人の状況に合わせて柔軟に設定し、午前中だけ、幼稚園のお迎えまでなど本人の都合に合わせて対応しています。

参加の保護者の様子を観て「この人はプレイパークが好きだな、世話人になってくれるかな」と思う人にはプレイリーダーが声をかけて協力をお願いすることもあります。

※1 NPO法人YPCネットワーク

市民と横浜市が連携して、子ども達の「やりたい」という気持ちや発想を大切にし、自由にのびのびと子ども時代を過ごせる遊び場（＝プレイパーク）を、子どもの生活圏に創る活動を行っている。

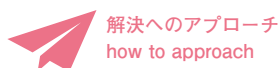
※2 プレイリーダー

子ども達が遊び場で生き生きと遊ぶことを補助し、そのための環境を作る人のこと。事故などが起きないように、安全に配慮した遊び場創りをするのもプレイリーダーの役割。子どもに合わせて柔軟に動き、手作りのおもちゃ制作や運動遊び、屋外での冒険遊びなど、子どもが遊びを通して成長できるよう促す。



課題2 広報周知

I プレイパークの認知度が低い



解決へのアプローチ
how to approach

地域とつながってプレイパークが認知され発展する

まだまだ、プレイパークを知らない人が多く、知ってもらうためのアプローチが必要です。「知らない」にも種類があります。

- 1) プレイパークが何をするとところか知らない
- 2) 地域の公園にプレイパークがあることを知らない
- 3) 利用対象者やプログラム、イベント情報を知らない
- 4) 誰が運営しているのか知らない

それぞれの「知らない」を解消できたら、もっと地域の子どもたちが元気よく遊ぶことができ、保護者同士、また、保護者とプレイパークのスタッフたちとのつながりも生まれて、子育ての不安や心配が軽減できるかもしれません。

「まんまるプレイパーク」に来る親子の中には、引っ越してきて間もなく知り合いもない、子どもを遊ばせる機会もなく地域の情報をあれこれ調べて、ようやくプレイパークをみつけたという人がいます。もっと、プレイパークの情報を入手しやすいよう工夫する必要があると思っています。

具 体 策

①都筑区の子育て支援拠点「ポボラ」とのつながり

プレイパークのイベント開催協力を得て、参加者にプレイパーク情報を発信し、チラシやパンフレットを配架しています。

②地域の小学校とのつながり

プレイパークのチラシを10年にわたり継続的に配布してもらっています。

③地縁役員・公園愛護会の理解と協働

地元の地域との関係性を少しずつ深めていく中、自治会町内会等の地縁役員や公園愛護会の理解が得られ、公園に物置を設置しプレイパークの備品を置かせて頂いたり、プレイパークの活動をするにあたり、公園内で火を使うことができるようになりました。

こうした理解と協力の広がりには、プレイパークの活動がしやすくなったり、子どもたちにとって、必要な経験をするための活動ができるようになるなど、プレイパークの活動を発展させます。プレイパークは地域と共にあって、地域に育てられていると思っています。

④小学校や保育園がプレイパークを活用

小学校、保育園、学童保育所など地域の子どもたちの関係機関が、プレイパークを知り、プレイパークとともに、子どもたちにとって効果的な遊びの場としていくことで、プレイパークは、その存在意義を高めていくことができます。

例えば、近隣小学校の総合学習の授業の一環で、子どもたちが先生の引率でプレイパークを利用したことがあります。子どもたちは、プレイパークの場で、自由な発想で様々な遊びを考え、体と心を存分に働かせました。そして、これを機会に数名の小学生が、一人でもプレイパークに来て遊ぶようになりました。また、プレイパークで火を使用していることを知った地域の保育園から、焼き芋ができないかと相談がありました。園児たちが保育士さんと一緒にプレイパークで思い切り遊んでいる間に、高齢の男性世話人や子育て中の世話人が、焚火を準備。ホカホカの焼き芋が出来上がり、みんな大喜びでした。近隣の学童保育所の子どもたちは、プレイパークによく遊びにやってきます。学童保育の子どもは定期的に利用しているので、プレイリーダーも顔見知りで、子どもたちからニックネームで呼ばれています。

課題3 ニーズの把握

I 様々な子どもへの関わり方



解決へのアプローチ
how to approach

誰でも気軽に自由に居ることができる場

「まんまるプレイパーク」には、気が付くと、家庭に難しい課題のある子や、学校に行っていない子、同じ仲間と同じことをするところではなじめない子どもが集まってきます。彼らが、若者になって子ども時代を振り返るとき、「プレイパークが当時の自分にとって救われた場、唯一自分で行くことができた場だった」と気づくことがあると聞きます。

プレイパークの担い手は、不登校の子どもに対する専門知識を持った者はいません。しかし、子どもたち、一人ひとりの抱える課題には、プレイパークにいるスタッフ皆が、長い時間をかけて理解に努め、癒し合い、支え合います。だからこそ、成長の



過程の中の様々な状況の中でも、子どもたちの拠り所になり続けていると感じています。誰でも自由に來ることが出来る屋外の居場所は、とても重要だと思っています。

Ⅱ 子ども本位の居場所づくり



子どもの主体性を育てる

子どもの育ちや自立を阻む要因について考えるとき、子どもを育てる環境が、大人が管理しやすい場や機会ばかりになっていると思います。大人が責任を負うような状況になることは極力避ける、こんな社会の中では「子どものやりたいこと」は尊重されない。やりたいことがあっても、大人側の事情でできなくなる。子ども自身も、大人の考え方に合わせるようになり、自分の意見を発信しなくなる。大人のつくる子どもの居場所は、大人の目から見て「役に立つもの・誰が見ても良いと思うもの」であり、本来、子ども自身が求める、自分が「面白い」とか、誰にもわからないかもしれないけれど「自分にとっては大切」とか、そういうものでなければ、子どもの拠り所となる居場所にはならないと思います。

そういう意味で「まんまるプレイパーク」は子ども本位の、子どもの居たい場所にしたいと思っています。

親にとっての居場所も必要 多様な交流が人を支える

子育ての不安や大変さを抱えて、まんまるに来て仲間になる親子がいます。わが子だけを見ていると煮詰まってしまうけれど、ここでは皆で、すべての子どもを見守る。自分の子どもだけではなく、他の子どもも見守る中で、学ぶことも多く救われるのだと思います。

特別な枠組みもなく出入りも自由、学区の違う小学生、中学生など、出会わなかったかもしれない子どもたちが出会って、本当に仲良くなる場所。本当に気の合う友達は、同じ学校、同じ学年とは限りません。ここでは年齢・性別も超えて仲良くなり、本当の家族のような関係性が出来る。そこが良さだと思います。

課題4 人材養成

Ⅰ スキル・チームアプローチ・価値観の共有



定期的なプレイリーダー・世話人研修

具 体 策

① 月1回、研修日を設けて

プレイリーダーの派遣元である YPC では月1回研修を実施

しています。講師は他自治体で活動するベテランプレイリーダーや専門家などです。プレイリーダーとしての悩みや迷いについてスーパーバイズしてもらったり、具体的なスキルについて学んだりしています。世話人は、月に一度、半日の活動日に、プレイリーダーから具体的な遊び方やロープワーク、リスクとハザードなどについて学ぶ機会を設けています。その際に気になる子どものようすなどを話し合う時間も作っています。

② 気持ちを一つに、まんまるを育てようとする意識

プレイリーダーである山崎夫婦は、まんまるプレイパークに関わり続けたいと公園の隣に引っ越しました。まんまるプレイパークとの関わるきっかけは、プレイリーダー、世話人共に様々かもしれません。でも「まんまるが大事」という気持ちは皆で大切にしたいと思っています。

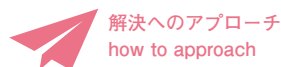
子どもたちの育つ環境は、変化し続けています。子どもたちにとって、遊びや仲間は、いつの社会でも必要なものだけれど、変化する社会の中で、まんまるがどんな遊びの機会を子どもたちに提供するのか、また、どのように子どもとの関係を築いていくのかは、まんまるチーム皆で語り合う必要があります。

一人の小さな想いや考えを言葉にして共有することで、課題解決の道が拓けたり、新しい取り組みの発想も湧くと思っています。

③ 皆が意見を出しやすくするためのファシリテート

まんまるが大事だから、想いがあるから、時には意見がぶつかることもあります。言いにくいことを発言しなければならないこともあります。大切な皆の意見が出しやすいように、こうした機会には、外部から皆の意見がスムーズに出せるよう、また、皆からどんな意見が出されたのか客観的にまとめるファシリテーター役の方をお願いすることもあります。

Ⅱ 新たなまんまるの在り方を探る



プレイパークが子どもに資するものであるために

居場所同士の繋がり、地域の様々な方とのつながりが大切だと思います。“子どものことは子どもから学ぶ”姿勢が大切だと思



います。少子化が加速していて、大人が意識しないと、子ども一人の周りに大人が何人も囲むことになっていきます。常に大人の管理の下で子どもは生活し、自分でものを考え、判断して、生活するという経験を失っていきます。

家庭や学校だけではなく、地域で、どう子どもを見守り育てるのか、様々な居場所や子どもを想う人々が繋がる必要があり、それを共有していかなければと思っています。

課題5 役割の設定と運営

I 組織が継続していくための見直し



解決へのアプローチ
how to approach

「まんまるプレイパーク」立ち上げから13年目。設立当初から代表を務めていた西田さんの大阪への引っ越しが決まり、代表交代が必要になりました。新代表を決めるにあたり、代表の仕事とはどんなことなのか、共通理解ができていないことに気づきました。また、どのように新代表を選出すべきか考える必要があることにも気づきました。

具 体 策

① 代表の仕事とは何かを世話人で共有

プレイパーク開催の申請提出書類作成／プレイパークネットワークの代表者会出席／毎月の報告書提出／毎月の定例会開催／必要な研修や助成金申請／地域や区との連携、会議への出席／近隣の小中学校へのあいさつ、広報／そのほか団体との連携／イベントの開催、協賛など／SNS、ブログ、ホームページ作成

② 新旧交代までのプロセス

代表の仕事を書面化する→プレイパークの仕組みを印刷し、世話人等に配布、説明→プレイリーダーと旧代表がファシリテーターになり、新旧の世話人が語り合う場を開催→代表を決めるための話し合いを数回に渡り開催→自分ができること、できないことを出し合い、分担等を決定

③ 新たな代表の決定

話し合いの結果、世話人の佐々木さんが「次の代表が決まるまでの任期であれば引き受ける」「みんなの支えが必要」との条件つきで引き受けてくれました。

そこで、新代表をサポートする形で、書類の作成、ITを活用した広報の実施など、数名の世話人さんで分担しました。また、地域関係団体などとの連携には、それぞれの世話人が住んでいる地域や子どもの通う学校などを担当。研修の企画実施などは、経験豊富な世話人が中心となり実施することとしました。SNSの活用などについては、新しい人材も加わり協力してくれることとなり、より充実させることができる結果となりました。

取材を終えて

「居場所」というと、多くの人が、屋内の空間を想像するでしょう。「まんまるプレイパーク」はもちろん、プレイパークは、地域の子どもたちにとって、まぎれもない「居場所」です。仕切りもない空間は自由に入りでき、遊びの達人のプレイリーダーや世話人と共に、様々な年齢の子どもたちが主体的に遊ぶ場は、ワクワクする面白さがあり、心が動きます。

昭和の時代には、こうした、雑木林や空き地などがそこかしこにあって、当たり前、異年齢の子どもたち同士で、日が暮れるまで遊んでいました。時にはケガやケンカもあったでしょう。でもその中で、子どもたちは育ちました。自ら安全を守ることや仲間を大切にすることも学んだでしょう。プレイパークは、現代社会で、そうした子どもの育つ場を取り戻そうとしている社会資源だと思います。人工的なものを極力省いた自然空間で、人を育て、地域を育てています。

横浜市には、NPO法人 YPC ネットワークがあり、市民と行政が連携して、自由にのびのびと子ども時代を過ごせる遊び場「プレイパーク」を生活圏に創る活動を行っています。これからも、子どもたちを心身ともに健康に育てるために、地域の中で、子どもを育て、プレイパークも育てていく取り組みが活発に行われることに大きな期待を持ちました。



Problem Solving

Case 5

学習支援・ごはん亭

山芋の会

南区

課題1 | 活動内容・活動方法

課題2 | 支援者の関わり

課題3 | 協力ネットワーク

課題4 | 資金と場の確保

山芋の会 山芋のような粘り強い、生活力のある子どもに育てたい！



山芋の会は、弘明寺駅近く、奥まった古いアパートの1階、1DKの1室。そこで小学生、中学生を対象にした学習支援を週4日実施しています。子どもたちにとって自然との触れ合いが大切と考え、魚釣りやキャンプなどの体験も月1回行っています。

昨年秋までは週1回の夕食の提供も行っていました。残念ながら大家さんの都合でこの場を3月末で立ち退かなくてはならず山芋の会としての活動は閉じることになりました。今後は別の場で、新たな活動を始める予定です。

この方にお聞きました

PROFILE

伊藤 富美恵さん（69歳）



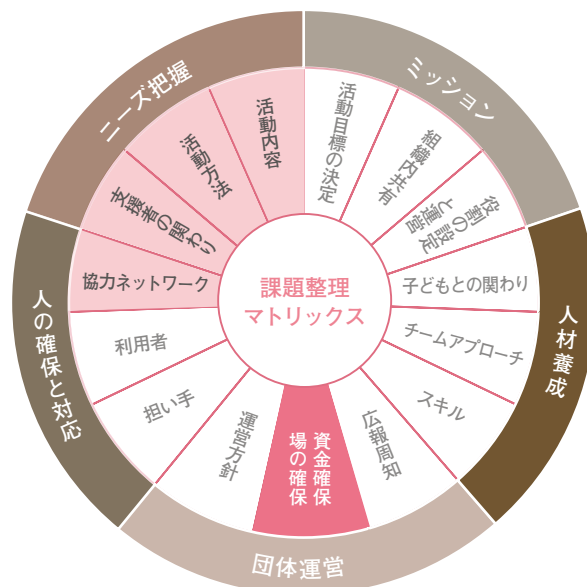
学生時代より女性問題に興味をもつ。

1980年、28歳の時、戸塚区の古民家で7人の子どもの対象にした学童保育の指導員となる。8年位の間に、通ってくる子どもは50人以上に増えたが、運営のあり方に疑問を感じ退職。

その後、41歳の時、再び南区の学童の指導員となり、20数年勤めたが、社会における学童保育の役割と実際の姿に違いを感じるとともに、学校の勉強についていけない子どもの問題が気になり、そのような子どもたちを支える学習支援を行うために「山芋の会」を立ち上げ今に至る。

活動のきっかけ

20年以上、学童の指導員をしている間、社会は変化し続け、家庭や子どもの暮らしは様々な影響を受けていました。働く女



性が増え、結婚・出産後も仕事を続けることが次第に当たり前になり、働きながら家族を守り、子どもを育てるという暮らしに時間も心も奪われ、余裕のない親が増えました。子どもにとっても、家庭という場の安心感が奪われているように思いました。一方、このような社会を背景に、学童保育のニーズが高まり、子どもの受け入れを拒まない学童は、急激に大規模化し、ひとり一人の子どもに丁寧に関わることができなくなっていったように思います。

共働き家庭の子ども達を放課後預かり、家庭の補完としての役割を果たそうとしていた学童保育が、物理的な預かりには応えられても、本来の役割が果たしにくくなっていることはとても残念なことであるし、子どもを育てる場である家庭・学童保育が共に課題を抱えることになっては、子どもたちに大きな不利益が生じると感じました。

しかしながら、通勤に時間がかかる、残業があるなど勤務先の課題や収入確保のための長時間労働やダブルワークは避けられないなど、親の働き方は多様化する一方です。また、家族形態についても核家族化は一層進み、一人親家庭も増加し続けています。

経済状態は子どもの暮らしに大きな影響を与えますが、経済的には恵まれていても、両親ともに勤務地が遠かったり、労働時間が長いなどの状況がある場合、子どもが一人の時間を、習い事や塾などを利用することで解決しようとする家庭もあり、

所在地 南区六ッ川1丁目 山之井荘1階
 開設年月日 2015年4月
 スタッフ 3名
 活動内容 □小学生・中学生の学習支援
 週4回(月・火・水・木) 16:30～
 会費500円 月謝(5000円～)

□夕食の提供(現在休止中)
 毎週金曜日 18:00～ 1食500円
 会費500円 月謝(5000円～)
 □自然体験(ハイキング、釣り、キャンプなど)
 毎月1回、夏休み

子どもはとても忙しく、親子で過ごす時間が少ない子どもがいます。また、経済的に厳しい家庭では習い事や塾にも行かせられないし、学力も遅れがちになり、親も子ども、助けを求められず、学童保育での長時間保育に依存し、心身ともに疲れた親と学童保育から帰り遅い夕食を食べる。そんな家庭や子どもをたくさん見るようになりました。

たくましい子どもに育って欲しいから

学習支援「山芋の会」誕生

2015年4月、元学童保育の指導員3人と6畳一間を借りて、子どもの学習支援を始めました。立ち上げに当たり、区役所に、利用する子どもの紹介等をしてもらえないかと相談に行きましたが紹介は難しく、勤めていた学童で、毎日親の帰りが遅い子ども等に学習支援に行ってみないかと声をかけてもらうようにしました。

現在の山芋の会の活動場所は、学童保育のOBが紹介してくれたアパートの1階です。「山芋の会」という名前は、「山芋」はとても生命力の強い植物で、田舎の山にも、そして都会のコンクリートの隙間からも生えるたくましさがあること。また、大関松三郎の詩集の「山芋」が大好きだったことからつけました。

子どもにとっても保護者にとっても

居心地よく温かな場でありたい

学習支援は月・火・水・木の週4日、16時半から小学生の国語と算数、18時半から中学生の英語の学習をしています。現在は小学生が10名、中学生は4名参加しています。保護者の方と面談をしてから利用してもらうようにしています。

2015年7月から毎週金曜日の夕方、「ごはん亭」を始めました。保護者も含め15～18人が参加し、ぎゅうぎゅう詰めですが、大家族の夕ご飯という感じです。学校が終わったら、「山芋の会」で週4回勉強をして、週1回はみんなでご飯を食べる。そして毎月1回、みんなで自然体験としてハイキングに出かけたり、釣りをしたりします。「同じ釜の飯を食べた仲間」といいですが、一緒に体験し食事することで子ども同士、保護者同士、仲間意識が芽生え、つながりが生まれます。

貧困問題が子どものいる家庭に増えていますが、経済的な貧困ばかりが課題ではありません。食生活・学習環境・基本的な生活習慣など複合的な課題があります。

「山芋の会」は、子どもや保護者との関係を大切に、課題を予防すると同時に、子どもや保護者を地域から孤立しないよう、様々な活動を行っています。

「山芋の会」や「ごはん亭」が、子ども達に寄り添おうとしている私たちと共に、生活に根差した居心地よく、楽しく気が抜ける場所であることが一番と思っています。また、働く母親にとっても安心できる場でありたいと思っています。

課題1 活動内容・活動方法

I 子どもの生活課題対応と保護者支援



子どもも保護者も抱える生活課題

具 体 策

①保護者と共に考えにくくなった子どもの放課後

学童保育は、子どもたちが安全に安心して過ごせる居場所です。1980年頃の、共同保育時代には、どのような学童保育であれば子どもにとってより良い学童保育なのか、保育内容や運営方法などを指導者と保護者が一緒に考え、協力して運営していました。当時は、保護者の働き方も今とは違っていたし、学童保育を利用する子どもは今ほど多くはなく、親も子ども地域とのつながりがあったように思います。

保護者が主体的に我が子や地域の子どものことを考えること、また、親同士、時には支援者と共に子どもたちのことを考え、より良い環境を創ることは、子どもたちのためだけではなく、保護者の養育力を向上させ、地域からの孤立も防ぐことになると思います。まだ解決には道なかばですが、「保護者と共に」を大切に考え続けたいです。

②居場所が多様化するなかで居場所のない子どもたち

横浜市の学童保育は、毎月18,000円程度の費用がかかります。放課後、子どもを預ける場へのニーズが高まる一方、この費用負担が厳しい家庭も増えています。

横浜市には、各小学校に「放課後キッズクラブ」という居場所があり費用負担も低いため利用する子どもも多くなっています。どんな居場所も、子どもたちが毎日通い続けたい場所とならないことがあります。何となく馴染めない。だから、いつの間にか行かなくなってしまった。行かなくなっても、どう

して来ないのと気にされることもない。などの話を聞くことがあります。

家に帰っても家族がおらず、居場所のない子どもたち。コンビニ等、町の中をさまよって買い食いをしたりしながら過ごす子どもの姿を観ると、「居場所」の必要性と在り方を深く考え取り組んでいくことが大切と考えています。

③子どもはもちろん保護者にも必要な社会的支援

保護者の労働状況が変化中、労働時間の長期化は子どもに大きな影響を与えています。保護者の帰宅時間が遅くなることで、子どもが一人でいる時間が長くなります。習い事や塾に通っている経済的にゆとりのある家庭もありますが、それはそれで、子どもは毎日忙しくなります。遅い時間に帰宅する保護者は心身ともに疲れ、子どもとじっくり関わるができなくなります。また、子どもには自覚しにくい不安や心の貧しさのようなものに、保護者が気づけなくなり、いつのまにか子どもの心身の健康が脅かされることさえあります。こういったことから、子どもにはもちろんですが保護者にも寄り添った支援が必要だと思うのです。

そこで考えた活動が、夕食の提供をする「ごはん亭」です。子どもだけでなく保護者も兄弟も参加して、ワイワイ楽しく食事をする、家庭では味わえない大勢での夕食の提供です。できるだけ旬の食材を使って、栄養バランスを考えたメニューにしています。お米以外はあまり寄付に頼らず、どうしてもみんなでの食事を実現したく、自前で食材を購入して作っていました。

子どもの問題には、親の問題も同時にあり、親への支援も大切ですが、大人はなかなか変わることはできません。だから、優先すべきは子どもと考えています。お腹を空かせている子にご飯を提供し、勉強についていけない子には、学習の支援をしようと考えています。

但し、制度にも考えて欲しいと思うことがあります。横浜市は、子ども食堂を始める団体には市が支援（経済的）するという話も聞きました。市民活動の必要性があると考えているからとは思いますが、子を支え、親も同時に支えるには、「中学校の給食」を実現することは重要なことだと思っています。これは育ち盛りの中学生の健康を守り、経済的な負担だけでなく、時間や肉体的な親の負担を減らし、何よりも子どもが安心

して学校に来られます。不登校も減るかもしれません。子どもが安心して暮らし、食べ、成長することは、子どもの権利であり守るのは国の責任だと思います。

*ごはん亭は、メンバーの体調不良があり、昨年10月から休止しています。

Ⅱ 不足する生活体験、自然体験



生活体験・自然体験を子どもたちに

具 体 策

①さまざまな生活体験を活動の中で

山芋の会では体験を大切にしています。15年ほど前、学童保育の指導員だった頃、子どもたちと工具を使って自転車を解体してみたり、プロミスリングやビーズ細工など、男女問わず楽しく作って、バザーなどに出品したりしていました。最近は手先を使って物をつくるなどの機会が減っているのか、手先の仕事が苦手な子どもが増えているように感じます。

また、自然の中で遊ぶ経験も減少しており、自然を活用した遊びも知りません。月1回のハイキングや魚釣りなどの自然体験は、一つのニーズと捉えて取り組んでいます。自然体験は、藍染め体験、羊毛からの織物づくり、家庭ではなかなかしなくなった味噌づくりや梅干しづくりなど、さまざまに発展して、みんなで楽しんでいます。

②教科学習以外の経験が子どもの生きるチカラを育てる

夏休みにはキャンプに出かけます。自分たちで炊いたご飯と自分たちで作った梅干でおにぎりを作って食べます。自然の中で、火やナイフを使う体験は子どもの生活力を高めます。

たくさんの体験をして、その成功体験が子どもに自信をつけ、体験から自分の将来や夢が生まれてくると、子どもたちを観ていて実感します。自然体験のプログラムは、生活の基本を身に着けることを促し、生きるチカラを育てていくと考えています。



課題2

支援者の関わり

I 子どもとの関係のもちかた



解決へのアプローチ
how to approach

安心できる支援者と子どもとの関係づくり

具 体 策

①居場所に来ることが第1歩

中学生の学習支援を始めて、初めに来たのは不登校の子どもでした。彼はここでは勉強はせず、本を読んだりしながらごろごろ過ごしていました。寝転んですごせるというのは安心できているからかなと思っていましたが、継続して通い続けていました。次第に、釣りが大好きなことが分かり、釣った魚のさばき方を教えると、それが特技になりました。ここでも魚をさばいてくれます。誕生日にはおじいさんにリクエストして包丁をプレゼントしてもらったそうです。

②子どもが育つ環境を知り

子どもの心身の成長に寄り添うこと

今時の社会は、情報過多、ネット社会などと言われています。常にせわしく、情報が行きかう中に子どもたちもいて、それは、子どもにとって、当たり前環境になっているかもしれないけれど、自分の心や体をゆっくりと育てる環境が失われていると感じています。周りの大人は、子どもにゆっくり寄り添い、子どもの成長を見守り、支えることが求められていると思います。「山芋の会」はそれを実現したいと考えています。

③子どもたちの様子や会話から理解を深める

子どもたちは「山芋の会」で、親の前では言えないことや学校では話さないだろうことも子ども同士でおしゃべりします。その会話の中に、学校でのいじめや虐待、先生のことなど、気になるキーワードが出てくる場合もあります。それとなく耳を傾けて聞いていますし、何かの時のために、気になることはメモを取っ

ています。そして子どもの普段の様子には気を付けるようにしています。

課題3

協力ネットワーク

I 専門職とのネットワーク



解決へのアプローチ
how to approach

ネットワークを活用した子ども支援

具 体 策

①継続的な利用のための連携支援

立ち上げ期は、行政とのつながりも得られないまま行っていました。南区の子ども食堂ネットワークなどで、「山芋の会」の活動を知った区役所の子ども家庭支援課をはじめとする様々な機関から、子どもの紹介が来るようになりました。しかし、残念なのは、子どもに意志があっても保護者の考え次第で継続的な利用にならない場合があります。なんとか子どものために、継続利用できるよう多機関で協働で支えられたらと思います。現段階では難しいです。

②重い課題を抱える子どもへの対応

夜間、携帯が鳴り、無言電話の向こうに大変気になる状況や子どものSOSを感じる場合があります。不定期に「山芋の会」を利用する子どもの中には、家庭環境に明らかに問題があり、食事満足に取れていない子どももいて、相談機関に連絡を入れたこともあり。相談機関には、子どもの氏名・学校名など、事務的な情報を次々と尋ねられましたが、やり取りをしながら、この電話が子どもにとって不利益がもたらされないか、むしろ不安になり、詳細を話すことにためらいを感じました。このケースに関しては、電話対応の相談員の方が、「また電話します」と言われ待っていましたが、連絡はありません。子どもにも保護者にも、それを支援する私たちのような団体にも、共に考え、寄り添ってくれる相談機関が必要なのではないと思います。



梅干しを作る作業をみんなで体験しながら覚えていく。

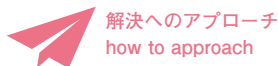


みそ玉を一生懸命丸める。自分で作るとまた格別に美味しい。

課題4

資金と場の確保

I 失ってしまう活動の場



アパートの閉鎖と共に失われる活動の場

具 体 策

①資金なく、場も失う「山芋の会」

現在のアパートは格安の家賃で借りていますが水道光熱費は発生します。運営は社協のふれあい助成金と、学習支援の月謝、ご飯は参加費でなんとかやってきました。キャンプや行事の経費はバザーなどで賄ってきました。

狭いながらも子どもたちにとってはくつろげる場でしたが、大家さんの都合でこの3月でアパートは閉鎖されることになりました。活動の継続のために近隣で物件をいろいろ探しましたが、残念ながら適当な物件は見つかりませんでした。仕方なく弘明寺からは一旦撤退することとなりました。

細々とですが5年間、子どもと関われたことは子どもたちにとっても私たちにとっても大切な時間でした。現在参加している子どもたちや、長い間支えてくださった保護者の方には申し訳ないことですが、「山芋の会」のような活動にとって、資金と場は最大の課題です。

②「子どもの居場所」のための公的な支援の期待

空き家、空き部屋はたくさんあっても、こうした取り組みに使うためには、高いハードルがあります。子どもや保護者を支援するために「場」は欠かすことができません。なんとか、必要と認められる取り組みに対して、公的な場の確保の支援（場の提供や家賃補助等）ができないもののでしょうか。横浜市には子どもが自由に利用できる児童館がありません。子どもの食の問題も中学校に給食があれば、かなりの子どもの栄養状態が改善されるはずです。

新たな活動の始動

具 体 策

①自治会に子どもの居場所の必要性を伝え続けて

地元の六ッ川団地へ場所を移し活動ができることになりました。自治会に、子ども支援の必要性や居場所づくりの要望を伝え続け、地域の皆様から賛同を頂きました。

また、山芋の会にあるたくさんのお本を団地の図書室に寄付させてもらい、その児童書を利用した活動と学習支援を、連合町内会の活動として、月1回から始めることになりました。

②子ども食堂を始める動きも

子ども食堂の活動も始めたいという動きがあり、形は違って、一緒にやっていけたら良いと思います。山芋の会を閉じるのはとてもさみしいのですが、5年間よく続けられたとも思います。

あまり大人数でなく、一人ひとりの子どもにゆっくりかわれる、「敷居の低い子どもの居場所」。いつ行っても誰かしら子どもがたむろしていて親の前では言えないようなことも言い合っていて、ふざけ合い、そばにはニヤニヤ聞いているだけの大人がいて、勉強のわからないところがあれば一緒に考えて付き合ってくれる、そして低価格のご飯が食べられる、そんな「居場所」を今後も創ることができたらいいなと思っています。

人は、どこかに属して、アイデンティティが形成されるのだと思います。同じ釜の飯を食い、意見の違う人がいるんだということを認識し、時には身体と心でぶつかり合い、喜怒哀楽を共にし…。自分と他人は違うんだ。でも共に生きていくんだと理解することは、人と人が認め合い、場所や思い出を積み重ねることで育ちます。そして、それは大人になっていくためにとても大切です。孤立や孤独が、人生にとってろくなことにならないということは歳をとってしみじみ思うことです。

取材を終えて

山芋の会は細い路地の奥、街の片隅にある小さな居場所です。利用する子どもも十数名と多くはありませんが、昔の大家族のような雰囲気が子どもにも、そして日々忙しい保護者にも、安心できる居心地の良い場所なのだろうと感じました。

子どもやその家族が抱える様々な問題を受け止めながらも、学習や体験活動を通して、子どもたちの生きるチカラを養い、達成感や自信を得て、どんな環境にも負けない強さを持って生きていけるよう支援していることがよくわかりました。

5年間続けたこの居場所が閉鎖されることは、子どもや保護者にとっても、とても残念なことでしょう。六ッ川の団地での新たな居場所には、大きな期待がありますが、居場所になる「場」が不可欠であることは、本事例に出会い痛切に感じました。

「山芋の会」は大きな場の確保がなかったわけではありません。「山芋の会」が目指す家族的なスタイルがあり、この場は、会議室や研修室等の公共スペースが必ずしもふさわしいわけでもありません。

伝え方が難しいのですが、少し、閉ざされた場だからこそ、温かくて、安心感があって、帰属意識を持つことができて、家族のように温かく見守ってくれる大人や仲間を感じることができる。そして、そんな場から、子どもの生きるチカラがゆっくりと育まれていくのかもしれない。こうした活動をなんとか継続できる仕組みがつくれないものかと考えさせられました。

Problem Solving

Case 6

子どもへの学習支援と一緒に作って食べる子ども食堂

アソシエーション てらこや
こどもごはん

緑区

課題1 | 活動目標の決定・役割の設定と運営

課題2 | 活動内容・役割方法

課題3 | 団体運営
場の確保・資金の確保・広報周知

課題4 | 子どもとの関わり

子どもへの学習支援と一緒に作って食べる子ども食堂

アソシエーション てらこや
こどもごはん

小学校での学習ボランティアの経験から、教室の中では学習についていけず置いて行かれる子どもがいることに気づき、少しでも子どもたちの力になればと思い、同級生の母親2人で学習支援をはじめました。活動していく中で、子どもたちの生活面、特に食生活について気になり、子どもが自分で食事を作る力も育てようと「こどもごはん」も開始しました。

この方にお聞きました

PROFILE

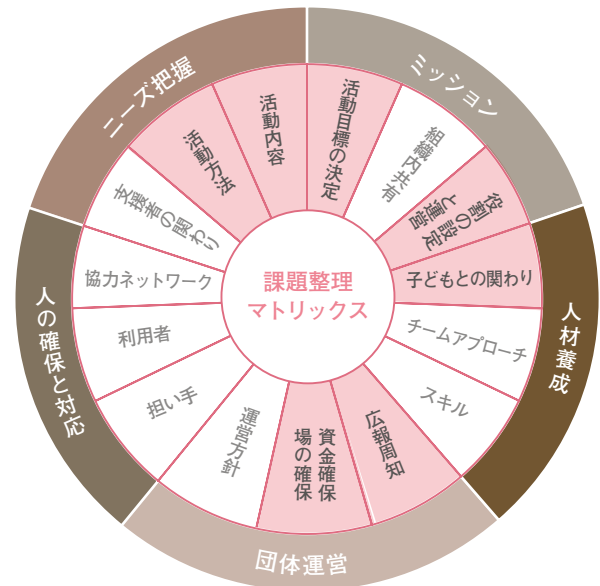
高橋 康子さん (57 歳)

ワーカーズコレクティブ「ひまわり」代表。活動のきっかけは、児童養護施設の家庭教師ボランティアに参加したこと。子どもがその時代の社会で生きて行けるよう育てることは、親の役割であり社会の役割だと思っている。生きる力をつけてもらいたいと思うから「てらこや」に来る子どもたちにも、厳しく言うようにしている。



酒井 朋子さん (52 歳)

教師を志望し、中学・高校の数学非常勤講師を務める。数学を教える一方で、生徒一人ひとりの困りごとが気になり、支援活動に興味を持つ。結婚・出産を機に退職し育児サークル運営・自治会・子供会に関わり地域で子供を育てることの大切さを実感する。小学校で読み聞かせボランティアを立ち上げ、学習ボランティアにも参加。高橋さんとの出会いから土曜塾を始めることに。現在、発達障害・インクルーシブ教育・支援員の勉強をしながら、自宅でも「てらこや」を開いている。



活動のきっかけ

高橋さんと酒井さんは、それぞれの第1子が同級生で、15年来的ママ友達。子どもたちが通学していた三保小学校で、地域に向けて学習支援ボランティアの募集をしており、それに高橋さんが応募。最初の年は先生が事務局でしたが、翌年は、ボランティアが事務局を担うことになり、高橋さんが事務局となり、地域コーディネーターI期生として活動を始め、後に酒井さんも一緒に活動することになりました。

当時(2008年)、三保小学校はPSY(パイオニアスクール横浜)に指定され、学習ボランティアが授業のサポートに入ることで地域の力を活かした教育を目指しており、素晴らしいことと思って参加しました。実際に学校で授業に入ると、35人のクラスの生徒たちの中で、学習が理解できないままに取り残されていく子どもがいて、このような子どもをサポートするために、学習支援ボランティアの活動に意義があると実感しました。

しかし、先生と学習支援ボランティアがサポートに入り授業を進めることは容易なことではありません。残念なことに、学習ボランティアが活用されたのは、たくさんある授業のなかで一部。すべての先生にボランティアを活用してもらうには至りませんでした。それでも、九九の聞き取り、ミシンのサポートなど、ちょっとした学習のサポートを行ってきました。

発足から5年で、学習ボランティアの活動は、家庭科(調理・

〈てらこや〉	
開催場所	ハーモニーみどり（緑区福祉保健活動拠点）
開設年月日	2014年4月
担い手	2名
参加費	6か月1000円
活動内容	☐ 算数、数学の学習支援（小学3年～中学3年） 利用条件：塾や家庭教師を利用していないこと 毎週木曜日 ① 17:30～（小学生）10名 ② 19:00～（中学生）4～5名

〈こどもごはん〉	
開催場所	生活リハビリクラブ鴨居
開設年月日	2015年
担い手	4名
参加費	子ども100円 おとな300円
活動内容	☐ 子どもと一緒に昼食づくり 毎月第2日曜日 11:00～13:00

ミシンなどのサポート）・安全サポート（火や刃物を使うときのサポート）・課外授業（引率のお手伝い）、他にも必要な時にということになり国語や算数といった教科学習のサポートは辞めることになりました。

一方、学校で補習塾「土曜塾」を月2回第2、第4土曜日に開くことになり、学習支援ボランティアの活動の場が、追加される形になりました。しかし、土曜登校が増え、土曜塾が月1回に減り、それをきっかけに、「自分たちで学習支援をしよう」と考え、学校にPRなどに協力して頂き、2014年「てらこや」を始めました。

最初は、生活クラブ生協の会議室を無料で借りて行っていたが、会議室が閉鎖されることで、ハーモニーみどり（緑区福祉保健活動拠点）を借りて活動しています。学習支援を始めてからは年末年始以外、毎週木曜日の夕方、活動を続けています。

課題1

活動目標の決定 役割の設定と運営

I 比べられて育つ子どもの育ちへの影響



解決へのアプローチ
how to approach

子どもたちがのびのびと学び成長できる場づくりを

本来、学ぶということは、それぞれの子どもの学びたいと思うことを学ぶことであり、全ての子どもに同じことを出来るようにすることではないと考えています。勿論、学びに興味関心を待つよう、学ぶ事は楽しいことなんだと実感できるよう働きかけも大切ですが、「できるようになる」ではなく、子ども達が一生懸命考えよう取り組んだかが重要だと思っています。

「てらこや」は少人数異学年が一つの部屋で「ごちゃまぜ」に勉強しています。そこには、せっかちな子もいれば、時間をかけてじっくり取り組みたい子もいます。授業についていくのが難しい子、逆に学校で教えてもらうことだけでは物足りない子がいったり、お母さんや兄弟と一緒に来ることが出来る子もいます。学年を分けることなく、いろいろな子がいるということは、まわりと比べることがなくなり、ありのままの自分で学ぶことができています。比べる、評価するは本来の学びの妨げになると改めて感じています。

「てらこや」では、小学校の算数、中学校の数学の復習・補習

をしますが、必要に応じて数理パズルや思考する楽しさを味わえるような問題を出しています。開始当初は算数の学習につまづき、自己肯定感が下がってしまう子どもたちの力に少しでもなればとの思いで始めました。活動を通じて全ての子どもたちに、自由にありのままで学べる場、その子の持っているものを評価するのではなく、そのまま価値があると受け入れてもらえる場所が必要だと感じ活動しています。

保護者（親）とのかかわりを大切に

てらこやでは、子どもとの関係だけでなく、親との関わりも大切にしています。

てらこやには、様々な学びの場の情報をキャッチして、自分のこどもに合った学習をさせたいという意識の高い家庭の子どももいます。一般の塾には行きたくないけど、てらこやなら楽しく通える子、体力、気力が不安で自分のペースで学びたい子、同学年では他の子と比べられて嫌だけど異学年だとのびのび学べるという子など、様々なタイプの子どもがいます。

入会の際には、保護者と面談をして、「てらこや」は塾とは違う学びの場であることを理解してもらうようにしています。また保護者には、入会後も気になったことを共有するばかりではなく、ポジティブエピソード・・・子どもたちが一所懸命取り組んでいること、がんばったこと、楽しかったこと、てらこやに来て変化した様子なども、電話やSNSで伝えています。

II 学力だけでなく身につけて欲しいこと



解決へのアプローチ
how to approach

社会で生きる力を養う

社会情勢が変化し続けている中、生きにくい社会と感じている大人が多いと思います。人間関係が希薄になると、地域社会とのつながりを広げ、深め、豊かに生きることイメージも持てないかもしれません。

「てらこや」では学習だけではなく、子どもが社会でたくましく生きていけるよう、どうしたら自分の良さや努力を認めてもらえるかの「術」を伝えています。提出期限を守ることや先生が認めてくれることもある。点数につながってなくても、その子なりに努力したことが伝われば理解してもらえる。社会で生きるための力をつけて欲しいと思っています。

想いを打ち明け、気持ちの整理をすること

子どもと雑談をしていると、素の顔が見え隠れします。大切な話にも何気ない話にも耳を傾け、聴くようにしています。自分の話を誰かにゆっくり聴いてもらえる環境は全ての子どもに必要です。子どもたちの中には、親には心配かけたくないとか、理解されにくかった時など面倒なことにもなりかねないし、怒られることだってある…等で、心のうちを明かさない、明かせないこともあるようです。学校の先生には、成績に影響するかもしれないし、レッテルをはられる気がする等で、やはり、なんでも話せる対象にはなりにくいとも感じている子もいます。

人が何かに葛藤したとき、誰かと共有したいと思うことがあります。伝える側が、自分のことを話しながら、起こっていることを整理し、話している相手に意見を求めることもあります。自問自答しながら、解決策を見出すのです。てらこやの子どもたちにとっては先生でもない、親でもない、利害関係のない斜めの関係でありたいと思っています。

課題2 | 活動内容・役割方法

I 子どもたちのニーズに対応する「子ども食堂」



解決へのアプローチ
how to approach

いわゆる「子ども食堂」は子どもに食事を用意してあげている場所だと思います。しかしそれよりも、子どもたちが自分で食事を作ることができるよう、家にある野菜を食べられるようになって欲しいと思い、作って食べる「こどもごはん」を始めました。

II 生活力を身に着ける支援と方法



解決へのアプローチ
how to approach

食の提供から食事作りのチカラを身に着ける場に

具 体 策

最近「子ども食堂」の取り組みが広がり、無料で子どもたちに食事を提供しているところが多くなりました。「こどもごはん」の活動ができるのは月1回、1食100円で、子どもと一緒に昼ご飯を作ります。食生活によって健康を維持していくことは、とても大切です。

子ども達自身が食事作りをできるようになれることが、生きる力を身に着けることになり、それを教えることができたと思います。会場は生活クラブのデイサービスを使わせて頂いています。

子どもでも自分で作れるよう、包丁とガスコンロは使いません。まず、野菜を洗うところから始めます。野菜を手でちぎったり、はさみを使ったりして、電子レンジ・ホットプレート・オーブントースターで調理します。味付けも、ポン酢やごまだれなど市販の製品を活用します。そうすることで家にある野菜を自分たちで調理し、食べられるようになります。また、みんなで作ってみんなで食べることで、食の楽しさを知ること大事なことと思っています。食後は自分が使った食器は自分で洗います。

課題3

団体運営

場の確保・資金の確保・広報周知

I 場の確保 どこで活動するか



解決へのアプローチ
how to approach

公的機関の協力で無料で定期的に利用できる場の確保

「てらこや」は、緑区福祉保健活動拠点「ハーモニーみどり」の夜間の時間を毎週、定期的に使わせてもらっています。無料で借りられていることは何より助かります。活動の継続に場所が



あるということはとても大事です。ロッカーもあり、教材も保管できます。

「こどもごはん」は、生活りハビリクラブ鴨居運営会議とワークスコレティブひまわりの共催という形で、生活りハビリクラブのデイサービスが休みの日曜日に会場を使わせてもらっています。調理器具も揃っていて、とても助かります。

Ⅱ 資金確保 活動費をどうするか



活動費は助成金と参加費で賄う

「こどもごはん」を始めた頃、緑区の地域課題チャレンジ提案事業に選ばれ、3年間は助成金を受けることができました。そのことから「こどもごはん」のチラシを作成し学校に配布することができるようになりました。区役所の生活支援課とのつながりもできました。

「てらこや」は助成金で教材を揃えています。ほかに必要なものは、半年1000円の参加費で賄うことができます。

一方、「こどもごはん」はお米と野菜の寄付のおかげで、子ども100円、大人300円の参加費で賄うことができています。

Ⅲ 広報周知 活動を知ってもらうには



公的機関の広報誌等の活用による周知

緑区社会福祉協議会で区内の学習支援を紹介する広報に載ったことで、問い合わせがあり、参加するようになった子どももいます。あとは口コミで広がっています。現在参加者は、「てらこや」で小学生10名、中学生4、5名程度です。少人数異学年が実現できる調度良い人数です。

「こどもごはん」は参加人数が安定していません。誰も申し込

まない日もあれば、10数人参加する日もあります。

団体運営は、無理せず続けること

学習支援は高橋さんと酒井さんの他に、学習支援では、学生ボランティアが1名、こどもごはんは高橋さんと生活クラブの仲間の4人で運営していますが、特に困ったことはありません。勉強にとどまらず、子どもたちを応援したいという想いを共有できる方と一緒にやって行きたいと考えています。今まで活動してきた小学生が一人だけという年もありました。大切なのは人数ではなく目の前の1人を大切にすること、子どもたちへの思いを持ち続け、無理なく長く続けることだと思っています。

課題4 | 子どもとの関わり

I 見守る、寄り添う大人の存在



評価されない、子どもが安心できる時間を

現代社会は、可視化できるもの、点数化できるもの、生産性のあるものばかりに価値を見出そうとします。学校も社会も与えられたことをこなせる子、教えられたことを再現できる子が優れていると勘違いしています。

「てらこや」や「こどもごはん」の活動を通して感じることは、テストの点数や学習の評価など、可視化できるものばかりが成長ではないということです。子どもたち自身が、居場所で仲間や支援者と共にやるべきことに気づき、それができるようになった時、子どもたちは喜びを感じ、自信を持ち、仲間と共にいることに幸せを感じます。私たちがそんな場に出会ったときには、子どもたちを、精一杯褒めて、自信を持ってもらいたい、自己肯定感を育みたいと心から思っています。



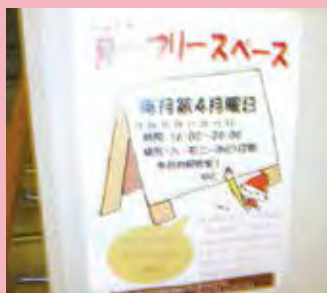
Ⅱ もっと多くの子どもの居場所が増えていくように



他の居場所づくりへの協力

自分たちの活動を大きくすることよりも、私たちの活動に興味をもって来て、他の場所で、自分の地域で活動を始めたいという方が増えていくことが大切だと思います。社協のボランティア講座などでの報告や見学を頼まれた時は、それをきっかけに新たに始めてくれる人がいればと思います。

多くの居場所があることが大切だと思います。また、居場所を作りたいと思っている方もたくさんいます。酒井さんは障害者と健常者を分けることなく共にすごすことがすべての人が幸せになり豊かな社会になると、共生社会の啓発活動もしています。高橋さんはハーモニーみどりの休館日に子どもたちの月1回の居場所づくりのために、NPO 等分科会に声をかけ、有志を募るなど、それぞれ異なる活動支援も行っています。



取材を終えて

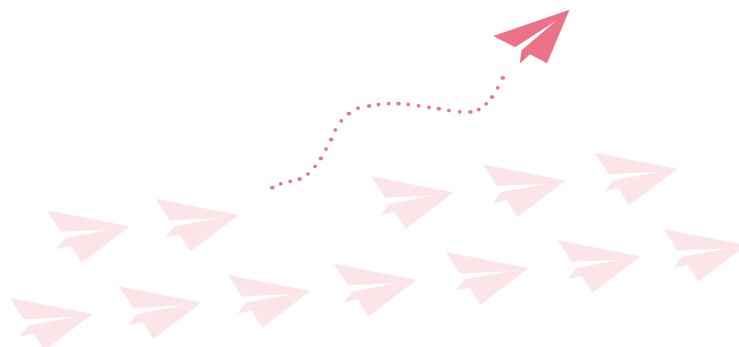
担い手の2人は、小学校の学習ボランティア当時から仲間、学習支援の目的を学力の向上という点だけでなく、社会で生きていく力をつけることに主眼を置いています。

子どもにとって大切なことは何かを考え、子どもたちが社会に出て、自分で考え、行動できるよう、地域社会で育てようとする活動ミッションもぶれることはありません。

評価されることで自信を無くしてしまった子どもに寄り添い、一人一人を認めながらも社会で大切な事をしっかり教えています。

「こどもごはん」も、そのミッションのもと、子どもでもできる食事作り、生活のスキルとして実施しています。2つの活動とも、無料で使用できる場があり、運営費もかからない工夫をしていました。

「課題は？」とお聞きしても「大切だと思うことを、無理せず、楽しく、やりたいことをやっているだけだから」と語るお二人の表情は明るく快活です。そう言いながらも、他の居場所の立ち上げを手伝ったり、個人のネットワークを使って居場所の担い手を発掘するなど、地域に居場所が広がることの大切さを感じ、支援していました。



Problem Solving

Case 7

空き家を利用したコミュニティ

街の家族

青葉区

- | | |
|-----|-------------------|
| 課題1 | 活動目標の決定・役割の設定と運営 |
| 課題2 | 運営方針・資金の確保（立ち上げ期） |
| 課題3 | 利用者と担い手の確保と対応 |
| 課題4 | スキル（人材養成） |
| 課題5 | 資金と場の確保（現在・今後） |

街の家族 どんな時もつながり合える居場所



青葉区奈良町一帯は、駅から離れた住宅地、宅地開発後 50 年が経ち高齢化が進む一方、転入子育て世代も目立つ地域です。「街の家族」は住宅地の中の空き家になっていた一軒家を利用した地域のコミュニティハウス。誰でも自由に出入りできる、美味しいご飯も食べられる、赤ちゃんからお年寄りまで多世代が交流する大家族のような居場所です。

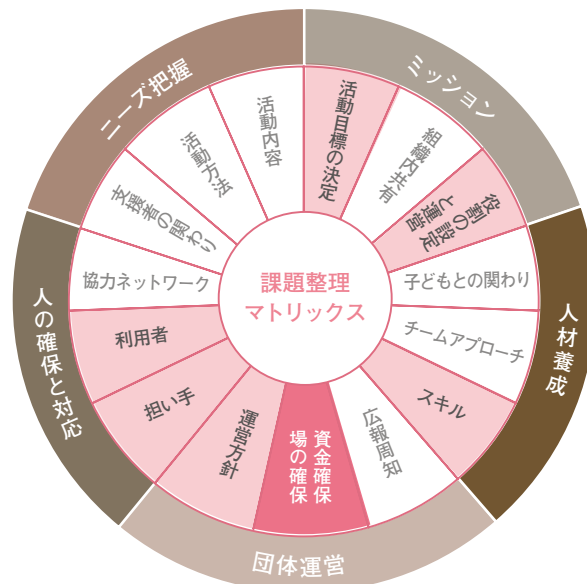
この方にお聞きました

PROFILE

小笠原 弘さん（77 歳）

事務局担当。青葉区内在住。

現役時代はエンジニアとして海外でのシステム開発に従事。退職後、地区センターの館長・副館長として 10 年間施設を運営していたが、その経験で、定年後の男性が地域と繋がる“本当の意味”での居場所がなかなか見つけれない、公共施設、地区センターやコミュニティハウス、ケアプラザなどではできていないことに気づき、住宅地の一軒家を利用した地域コミュニティハウスの運営に取り組んでいる。



活動のきっかけ

東日本大震災の後、小さい子どもがいるお母さんたちから、安心して子どもを外で遊ばせることができない、屋内で少人数でも活動できる場所が欲しいという要望が聞こえてきました。また、大災害を経験して、災害時に必要なことは、住民の互助、地域の繋がりであることを確信しました。社会の中で、近隣で、人間関係が希薄になっていると言われる今、世代を超えた繋がりへの再構築の必要性を感じていました。

ちょうどその頃、空き家利用をコーディネートする大学の研究室、NPO 法人などの協力で現在の活動拠点となっている家のオーナーと出会うことができました。オーナーさんは「愛する町に活かせるのであれば、できる限り活かして欲しい」と、ご自分の所有する建物を格安の家賃で利用させていただくことになりました。この空き家を活かして地域の居場所づくりが始まりました。地域との話し合いを重ね、2012年6月、住宅街の一軒家に「街の家族」が誕生しました。

私たちのミッション

「街の家族」は地域のコミュニティの場として、子育て世代とシニア世代が出会い、子どもを見守るための繋がりづくりと共に、子育て世代も、シニア世代も生き生きとまちで過ごし活動することを活動のテーマとしています。

地区センター、ケアプラザ、コミュニティハウスなどは、地



所在地 横浜市青葉区奈良町 1566-332
URL <http://www.machinokazoku.info>
開設年月日 2012年6月
活動内容 □ 多世代交流の居場所
 ・地域食堂（昼食の提供 1食 300円～500円）
 ・親子おしゃべり広場
 ・シニアおしゃべり広場
 ・自主事業
 ・季節のイベント

開催日 毎週火・木・金 ※水曜日は不定期
 10:00～15:00（出入り自由）
利用料 1家族1回100円または月1000円
 ※子育て中の家族は月500円

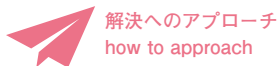
地域の拠点には違いがありませんが、住民が自分の居場所と感じ、そこで主体的な活動をする場にはなっていないと感じていました。

昔の長屋の井戸端やお寺の境内等、自然に人が集まり、そこに行けば仲間に出会える。それが本来の居場所と考えています。立派な場所でなくとも「人ありき」。緩やかに繋がり、雑談の中からやりたいこと、出来ることを形にしていける居場所づくりを心がけています。

課題1

活動目標の決定 役割の設定と運営

I 目指す方向性の共有・「なぜ創るのか」



解決へのアプローチ
how to approach

目指す方向性を定めメンバー・地域との合意形成を図る

働く世代人口減、子育て家族の共働き化、シニア世代の独居化進行など、広い世代の暮らしの変化から、外部地域からの転入者が増えていることなど、今、起きていることのすべてが、地域住民間の関係の希薄化が進むことにつながっています。

なんとかしたいという想いが芽生えていた頃、3.11（東日本大震災）後、横浜で避難生活をされる家族に、青葉区奈良町で長く空き家になっていた自身の住宅を無料で提供していたオーナーに出会いました。

オーナーは、自分の家を地域に引き続き活かしたいと思っており、私たちは、仲間の中でよく話題になっていた「非常時・災害時に本当に頼れる地域づくり」の拠点にすることができないだろうかと考えました。地域の有志に声をかけ、普段の生活の場で、皆ができる力を出し合って作り上げる、どんな時もつながり合える「街の家族」の企画を練りヨコハマ市民まち普請事業※1に提案することにしました。

「街の家族」の場合は、物理的な「場」には、幸運にも初期

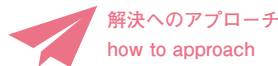
※1 ヨコハマ市民まち普請事業

防犯、防災、多世代交流、環境保全等分野を問わず、地域の問題を解決したい、地域の魅力をもっと高めたいという市民の想いを実現するための施設整備に対して支援・助成を行う事業。

段階で恵まれていましたが、その場（地域の中にある民家）を活かしつつ、「街の家族」をどう具体的にしていくのかは白紙の状態でした。開設する居場所が、地域の住民にとって資するものにならなければ意味がない。メンバーの「街の家族」のミッションに関する合意形成、住民へ、理解と協力を求める方法を見出し、取り組んでいく必要がありました。

そこで、助言などを求めるために、「ヨコハマ市民まち普請事業」に手を挙げました。この事業にエントリーできたことで、地域の取り組みをする市民団体に対して伴走的な支援をしている NPO 法人横浜プランナーズネットワークのメンバーの方々力を借りることができて、2年間をかけて、コアメンバーの中で「街の家族」の目指す方向性を確認すると共に、地域住民とも共有する手掛かりができて、「街の家族」開所にこぎつけることができました。

II 担い手の役割



解決へのアプローチ
how to approach

中心メンバーの役割分担を決める

地域住民の理解と協力を得て、「街の家族」を育てていくために、立ち上げ期から、運営の核になっていたコアなメンバーは、折々に想いを伝え合ってきました。

更に、具体的な活動に発展させていくためには、メンバーのそれぞれの強みも活かしながら、活動を展開させていくことが必要と考えました。それで、主な役割の分担もすることにしました。

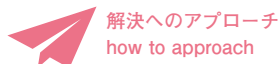
- ・申請書類や渉外は小笠原さん（地区センター管理の経験）
- ・日常の組織運営は、岩間さん（NPO の経験）
- ・子育て親子への周知、相談は押久保さん（子育て支援者の経験）



課題2

運営方針 資金の確保（立ち上げ期）

I 場を活かし、何をするか



解決へのアプローチ
how to approach

住民“みんな”のために“みんな”で創る

自治会や学校を中心とした地域の行事やそこに集う人のつながりはあるものの、世代を超えた新たな人の関係を生み出すような取り組みが地域にはありません

「街の家族」の活動は、伝統的な活動にプラスして、多様な世代の人が、それぞれ力を出し合って、日常生活に近い場所でのつながりを作り、結果として暮らしやすい、安心・安全で子育てがしやすい街づくりをしていこうとしていました。

拠点に来ていただいた住民へのアンケートやじかに聞く声、オーラルヒストリー調査^{※2}、まちの資源調査など進めながら、具体的な活動が浮かびあがってきました。

- ・食事の作り合いと食事づくりが学べる「憩いの台所」、
- ・子育てを支援する「街のリビングこども」
- ・庭造りや野菜栽培等を行う「憩いの庭」

この3つの事業を活動の基本にしました。地域のために活かして欲しいとお借りした民家が日常的に身近な横のつながりを醸成する活動拠点になりました。

※2 オーラルヒストリー

歴史研究のために関係者から直接話を聞き取り、記録としてまとめること。政治史・労働史・地域史などのように、歴史研究の方法としてフィールドワークの伝統が根づいているところや、学際的な交流がなされてきた研究領域で発展してきた。

※3 よこはまふれあい助成金

より豊かな市民社会の実現のために、市民の自発性のもと、横浜市内で行われる非営利な地域福祉や障害福祉推進事業の支援を目的とした助成金。

II 運営方針を実現させる資金確保



解決へのアプローチ
how to approach

さまざまな助成金の活用

この間、横浜市社会福祉協議会よこはまふれあい助成金^{※3}、生活協働組合パルシステム神奈川ゆめコープ市民活動応援プログラム助成金^{※4}を頂き、台所のオープンキッチン化、交流の場としての庭の整備や菜園の造成、通路や階段の手摺など、活動拠点の環境を整えてきました。これらの事業ベースの上に、利用者やまちの意見、要望を柔軟に取り込みながら、身近な生活圏の家族的な横のつながりを広げる活動「“こんにちわ!” 街」を現在進めています。「人は人の中にいるのが好きだから」を皆で心に刻みながら…。

課題3

利用者と担い手の 確保と対応

I 場の認知と活動への理解



解決へのアプローチ
how to approach

気になる場所から馴染みの場所に！

具 体 策

①子育て親子にとって、気になる場所⇒居心地よい場所に

開所当時は、「街の家族」が何をする所か住民にはなかなか理解してもらえませんでした。はじめに積極的に利用し

※4 神奈川ゆめコープ市民活動応援プログラム助成金

市民活動助成金は組合員が商品やサービスを利用することで生まれた剰余金を基に、誰もが安心して暮らしていける社会と地球環境を目指す市民活動を資金面で支援する仕組み。



てくれるようになったのは、子育て支援関係で、地域に声をかけた乳幼児とその保護者でした。「なんとなく気になる場所」から声をかけられて行ってみたら「居心地よい場所」に。継続的に訪れる親子になってくれました。

お母さんたちは、口コミや、SNSなどで保育園や幼稚園の親子に「街の家族」の情報を広げてくれました。また、保育園の園長が「街の家族」を地域の子育て支援や相談の場所として紹介してくれるようになりました。子どもが小学校に上がると、PTA やキッズクラブなどで情報を広めてくれます。

こうして、利用するみなさんの力もあって、利用者が広がるようになりました。現在でも子育て世代の利用が 70% を占めています。

②新しい住民の孤立防止に活かす

中心メンバーの小笠原は、奈良地区の住民ではなく、区内の他の地域に住んでいます。青葉区内も規模の異なる自治会町内会、また、地区社協のエリアなどの区割りがありますが

住民のための取り組みには組織ごとに温度差があるし、自分の住まいから拠点までの距離も自分の所属する自治会の拠点が距離的にも行きやすい場所にあるとも限りません。

「街の家族」は民間の活動なので、どの自治会員であっても利用することができます。他地域から転入してきた住民などは、是非、気軽に利用して欲しいと思っています。初めてやってきた方、散歩の途中に立ち寄った方、どなたにも「いらっしやい、どうぞ!」と優しく語りかけ、友だちの家を訪れたかのような居心地の良さを提供しています。

③シニア層の活躍の場に

利用が増えると地域全体に「街の家族」の存在、活動が伝わっていきました。増えたのは、利用者ばかりではなく、「街の家族」への協力者も増えてきました。まさに「街の大家族です」(笑)。例えば、頻繁に利用されているシニアの男性は、お昼ご飯の食器を洗うことがご自分の役割となっています。

「街の家族」は訪れる人が「お客さま」ではありません。自分の家で過ごすように役割をみつけて活動します。利用している人同士が助け合います。「自分の役割があること」は、安

心して利用できる場として大切なことなんだと発見しました。

利用者から担い手に、人材の循環

時間の経過とともに、乳幼児の子育て世代のお母さんの子どもが小学生になり、親に連れてこられてきていた子どもが、自分の活動する場として「街の家族」を利用するようになります。ここまで成長すると、この子どもにとって「街の家族」は長年利用した、勝手知ったる場所です。そうなれば、彼らは利用者である反面、担い手になります。

また、子育て期に「街の家族」を訪れて、親同士の仲間づくりをして利用をしていたお母さんが、子どもが小学校に入学する頃になると、小さな子どもの子育てママに、先輩ママとして相談に乗ったり、得意なことを活かして、「街の家族」で活動するなど、利用者がいつのまにか担い手もしているといった、継続して活動しているからこそ、柔軟な場所になっています。

「居場所にいる」から果たせる役割

「居場所がある」から救われる人

具 体 策

① 赤ちゃんがいる居場所

「街の家族」は、親子の居場所、遊び場所、相談場所であると同時に、地域の高齢者のサロンの役割も果たしています。「街の家族」に赤ちゃんがいるというだけで、赤ちゃんの笑顔、泣き声、ふれあい、抱っこ、それらが高齢者を笑顔にします。赤ちゃんの成長を母親と一緒に喜ぶ関係性がうまれたら、更に生きがいにつながります。高齢者に「何かしてあげる」より、高齢者自身が「何かしたい」がかなえられる場にこそ、人を元気にする力があると感じています。

② おじいちゃん・おばあちゃんがいる居場所

核家族化が進み、子どもと祖父母がふれあう機会が少ない中、街の家族ではおじいちゃん、おばあちゃんが、子どもの遊び相手をしめます。高齢者にとっても地域の孫育ての場にもなっ



ています。自然にふれあい、ちょっと見ていてあげる、ちょっと手をかす、ちょっと教えるなどが無理なく行われています。

③ 不登校の子がいる居場所

親子で訪れていた子どもたちが小学生になり、一人であるいは友だちと遊びに来たりします。中には不登校気味の小学生が、2階のカフェに来たり、平日の日中に過ごしたりすることもあります。小さいころにお母さんと来ていた「街の家族」が、学校には行けなけれど行ける場になっているのです。居場所のスタッフや利用者も「不登校の子」という意識はなく、小さい頃からきている子どもが遊びにきているという認識です。

課題4 スキル（人材養成）

I 多様な世代の発想を活かす



解決へのアプローチ
how to approach

色々な世代の企画と実践が地域をつなぐ

具 体 策

① ミシンカフェ

若いお母さんたちが子どもの入園入学に際して必要な手作り品の制作に悩んでいるという情報をキャッチして、定期的に木曜日「ミシンカフェ」を実施。雑談の中から、こんな企画があったらなを実現します。

② 生活の知恵を伝える場

お昼の食事をおばあちゃんと母親が一緒に作りながら、おしゃべりに花を咲かせつつ、お惣菜の作り方を覚えます。子どもたちも作ったご飯と一緒に食べますが、好き嫌いのある子もみんなと一緒に食べられたりしています。他に、若い世代の家庭では、あまりしなくなった味噌づくり・梅干しづくりなども、若い世代に伝えています。災害の備蓄としても活用しています。

③ 広報紙制作はITスキルのある若い世代が担当

若い世代はスキルを活かし広報紙「街だより」も毎月欠かさず作成して配布しています。ホームページやSNSでの発信もとてもうまく使いこなしています。これができていることで、「街の家族」の周知は一層広がっています。

④ 若い世代の取り組みから収入を得る道の模索を

シニア世代は居場所で何か担うことで「やりがい」を感じ満足していますが、若い人はそれだけでなく手づくり品などを街の家族で販売、また、カフェの運営などで、多少のお金を得る仕組みも作り、継続して活動出来る仕組みを作っています。共働き家庭も増える中、若い世代には、個人の収入にもつながるような次の段階の仕組みが必要になってきているように思います。これから、更に検討していく必要があります。

課題5 資金と場の確保（現在・今後）

I 空き家利用の継続のための資金確保の困難性



空き家維持の経費捻出に悩みは続く

現在、運営の経費については基本的に利用者（担い手、ボランティアも基本は利用者として負担する）の利用料（1回100円）、食事代（300～500円）、お茶代、講座、イベントの参加費、これに加えて、各種の助成金（民間等）や寄付などによって、家賃や光熱費、他の経費を賄っています。

しかし空き家の維持には修繕などを考えると経費がかかります。空き家活用当初の行政の支援、制度はいくつかあるようですが、継続のための支援策はありません。

小規模多機能拠点の必要性

具 体 策

① 要支援・要介護の高齢者が通い続けられる「街の家族」に

開設から7年が経過して、地域の子育て世代のための居場所、元気なシニアの居場所を緩やかに実現してきました。子どもは学齢期になり、その親たちは子育てから少し解放されて、自分の仕事や活動などに踏み出し、新たな乳幼児子育て世代が加わっています。他方、高齢者が年齢を重ねて、要支援など介護予防が必要になる方も出てきました。

これらの人たちが「街の家族」を利用し続けられるようにする。また、介護施設などと並行して利用できるようにするために、どのような方策があるのか模索中です。

② 多世代交流を活かし、介護予防の場としての機能を

「街の家族」を運営してきて気づいたことは、高齢者と子

ども、また子育て中の若い世代等が共にいて、交流することこそが、高齢者の介護予防であり、子どもやその親にとっても、安心を得ることができるのだということです。「街の家族」の取組は、こうしたことを発見できたこと、地域みんなで、そういう場を継続していることだと思います。

今後はこうした考え方や実績を活かして、横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業（サービスB）^{※5} 等制度サービスへの参画・申請も視野に入れています。

③ 小規模多機能拠点+まちづくりセンター機能を備える

地区センター、コミュニティハウス、ケアプラザ、スポーツセンター、図書館など様々な市民利用施設がありますが、それぞれが行政の縦割り制度の中で機能が分化され、まちづくりの拠点としての役割を担う場がありません。市民のためと言っても利用団体のための場所となってしまう。横浜市には子どもが自由に利用できる児童館がありません。市民利用施設を自分たちの街づくりに活かしていくとする住民の問題意識の弱さも課題であると思います。

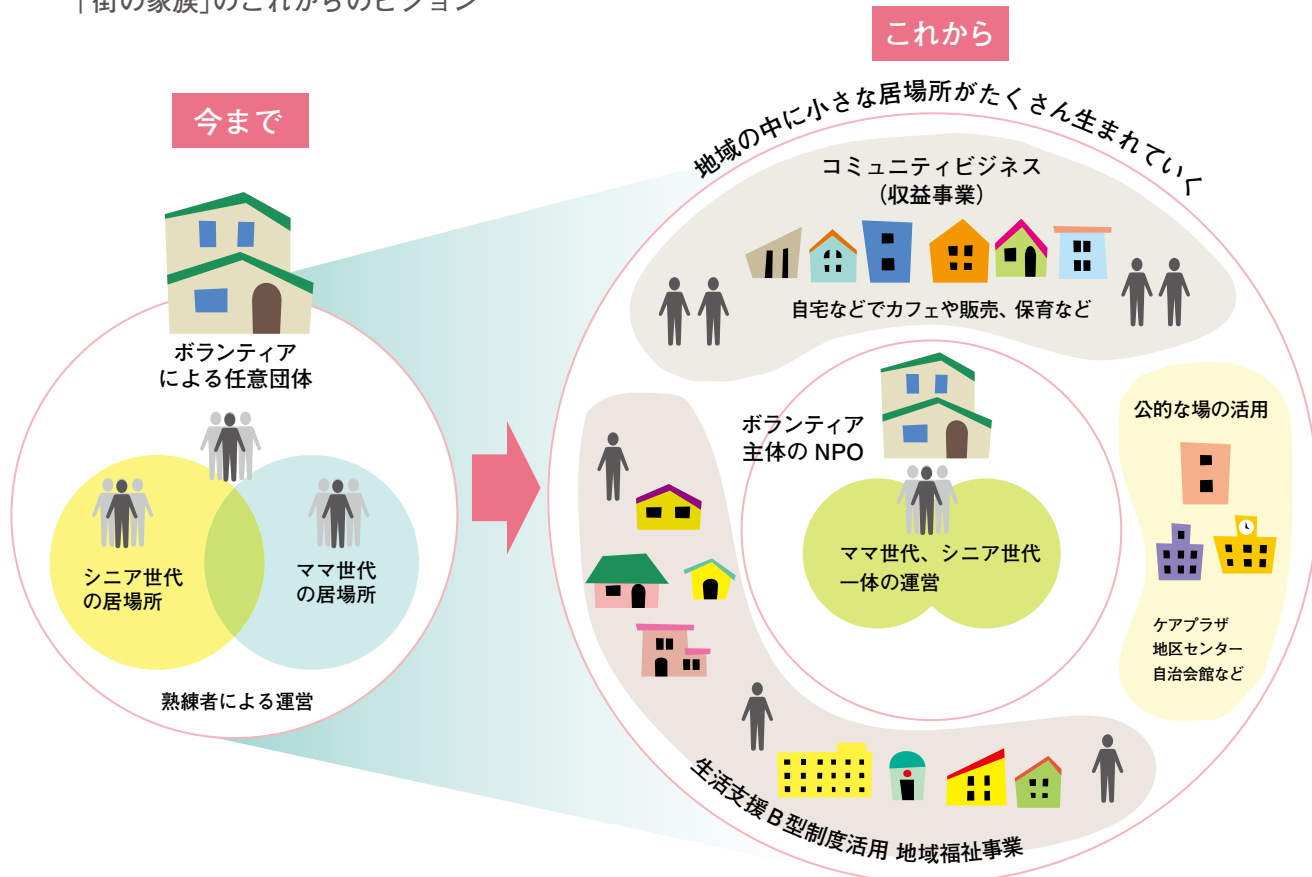
「街の家族」では、今後公的な制度を利用して運営を活性化するとともに、多世代の共生、本来の家族的な居場所づくりの大切さを、実際の居場所の運営を通して、多くの人や行政にも理解してもらい、子どもたち、親たち、その上の世代それぞれが生き生きと緩やかにつながれることを目指して活動していきたいと考えています。

※5 横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業（サービスB）

ボランティアを始めとした地域住民の方々が、要支援者等の方に向けた介護予防・生活支援の活動を行う場合に、その活動に係る費用に対して、補助金を交付する事業。



「街の家族」のこれからのビジョン



取材を終えて

「街の家族」は、地域での、また、世代間での関係の希薄化や人々の暮らしの孤立などに課題を感じ、地域での課題解決を目指して立ち上がった団体です。7年間の間に、当初の目的は達成され、活動は発展しています。

活動が優れていると感じたのは、まず、一人の想いを、他者と共有し、合意形成をはかり続けて、一步一步取り組みを発展させる姿勢です。コアな3人のメンバーから「街の家族」を理解し共に歩む地域の人々がどれほど広がっていることでしょう。

更に、どんな具体的取り組みをするかについても、多様な世代の、多様なネットワーク・情報・スキルを持つ、地域の住民のチカラを活用しています。小さな拠点ながら、様々な活動を展開し、人を集めることができているのは、単に利用者を集めているのではなく、「街の家族」という拠点のなかで、人が対話し、知り合い、互いを理解しているからこそ、こうした、人を活かすということが成功していると思いました。

また、場の確保に関しては、発足当初の地域の住宅

オーナーとの出会いがありましたが、この維持継続、また運営資金の確保などは、多様な助成金のリサーチや申請など、コアメンバーの役割分担の役割が果たされているからに違いありません。

しかしながら、「街の家族」としては、新たな局面も迎えているように思いました。継続しているからこそ、多様な利用者を受け入れ、利用を継続できるように対応するための市民活動を支援する制度の不足。あるいは、「街の家族」があるから幸せに地域生活を営んでいる人々にたいして、代替的な縦割りを越えた柔軟な制度サービスが無いことに気づかれていることです。また、多角的な取り組みを継続する中で、安定的な資金の確保によって、スタッフの賃金や必要な経費を捻出する必要があることも模索する必要性が出てきていることです。

これまで、努力されてきたからこそ、向き合っている課題と思いますが、是非、団体を越えた、居場所の取り組みをされている団体ともネットワークを広げ課題解決に近づけますようにと思いました。

編集後記

「横浜市子どもの居場所づくり 課題解決ケースブック」の制作にあたり、市内、約 50 か所の居場所活動を対象にアンケート調査を行いました。

回答から、市民を中心とした多様な居場所が、子どもや若者と向き合い、時に、その家族や地域とも向き合い、健やかな子どもの成長を願い、主体的に、活き活きと活動していることがわかりました。

一方、それぞれの居場所は、様々な課題も抱えていました。乗り越えようとしている課題も、努力によって乗り越えることができた課題もあります。

しかし、どうしても自らのチカラでは解決できず、立ち往生している課題もありました。

これらのことを、他の子どもの居場所づくりをされている方々に参考として欲しい。また、居場所と居場所のつながり、居場所と関係機関等とのつながりが生まれ、広がるネットワークの中で、知恵と工夫を結集し、解決につながれたら…。

そんな想いや願いから、回答を頂いた活動団体から 7 つの居場所に取材をさせて頂き、「横浜市子どもの居場所づくり 課題解決ケースブック」が誕生しました。

取材に、また、原稿執筆にご協力いただいた 7 団体の皆さま、本当にありがとうございます。是非、沢山の方々に、ご覧いただきたいと願って編集後記とさせていただきます。

特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター

発行者	横浜市 こども青少年局
取材協力	金沢子ども食堂・ホッとサロンすくすく／友ゆうスペース／おっちー塾／まんまるプレイパーク／山芋の会／アソシエーションてらこや・こどもごはん／街の家族
企画・取材・編集	NPO 法人 よこはま地域福祉研究センター
デザイン・DTP	NPO 法人 よこはま地域福祉研究センター
発行日	2020 年 2 月

YOKOHAMA

横浜市子どもの居場所づくり
課題解決 ケースブック

Problem Solving Casebook

2020

